

新しき薔薇
畑耕一著



始



86

持234
14



新

畑



し

耕



き



番



薇



近
代
小
説
社



新しき薔薇
畑耕一



山 靈

——搏^{ひらみ}己は、もうへト／＼になつて、斧を投り出すなり、そのまゝ地べたにしやがんでしまつた。

身體の節々が抜けるのではないかと思はれるまで痛む。みだれた頭髮が、ベツトリと汗で額にねばりついてゐる。手をやつて掻きあげようとすると、グラ／＼とはげしい眩暈に襲はれた。こいつはいけないと、しばらく眼をつぶつて、息を整へてゐたが、起きあがる氣力もなく、ベツと忌々しげに空^{から}唾^{つば}を吐いた。

「……馬鹿々々しい！ なんの眞似だ！」

彼は、樹の間から射し込む夕日に、薄暗く^あ壓し流されてゐる自分の影を見つめながら、あざけるやうに舌打ちした。

——八月の末、東京を去つて、この樺太のホムトフカに、流し者も同様な「苦役」をさせられることになつた。——苦役！ たしかに苦役である。朝はまだ暗い冷たい霧のかゝつてゐる

頭から起き出て、斧をかつぐとみんなですぐ森へ来る。仕事にかゝる。日が山の彼方に沈むまでほとんど斧の手はすめない。身体はいつぱし健康ではあるのだが、馴れぬこととて、人一倍も二倍も疲れる。一日の仕事を終へて歸る時など、精も根も盡きはてて、足は鎖をひきするやうにも重い。バラツク建の寄宿舎の部屋で、五十人ばかりの仲間とともに、砂のやうにザラついた飯と、鍊か鱈の干物、それに梅干といふだけの、ほとんど咽喉に通らさうにもない夕飯をすますと、夜業の細なひや、燐寸の軸木製造を手傳はされるのである。――

「ふん、馬鹿にしてやがる！」

こみあげるやうな不快と不満とに、博巳は樹の根を枕に、ドクリと手足を投げ出して、仰向けに寝ころんだ。

密生した落葉松の影が綺をなして交錯してゐる。八月末とはいひながら、夕風は寒くあざくられてゐる、九月の半ばを過ぎると、もう霜を見るときといふのである。朝ははげしい濃霧が襲ふ。こゝへ送られて、まだ十日とたぬ彼の眼には、自由で屈托のないこの大自然が、陰鬱に、荒涼として鎖された黄泉の國のやうにも見えるのであつた。時々、森の奥から奥へ、相疑うて叫

ぶやうな百舌鳥の聲や、小さな怪しい銜をつくる、啄木鳥の嘴の音の聞えるのも、なんとはなしにもの凄じい感じを與へた。

「あゝ、嫌だ〜！」

彼は足さきに觸る土塊を、蹴飛ばしながらつぶやいた。

……切つて倒した枯木の枝に

花が咲くかや仇花が……

元氣のいゝ唄に、丁々とうつ斧の音がまじつて聞えた。

……下へ〜と枯木を流す

流す枯木にや花もない……

彼方のはうで、調子の高い唄が應じた。活氣づいたやうに、彼の周圍にまたひとしきり斧の音が續いて起つた。

「……ふん、馬鹿にしてやがる！」

彼はまた足さきで土塊を蹴飛ばした。

「どうだね。ひどく弱つてるやうぢやあねえか。」

——その時通りかゝつた一人の人夫が、斧を肩にしながら、彼の上からのぞき込んだ。

博巳はチロリと眼をくれたが、知らぬ顔で應へもしなかつた。

「はゝゝゝ。よつぽどへたばつてゐるやうだな。お前、なんでも東京ぢやあ、いゝ家の息子つてぢやあねえか。それぢやあこんな仕事は無理だ。」

人夫はをかしげに笑つた。博巳は相手にしたくないやうに、ブイと眼をそらした。

「ほんたうにな。こんな仕事は無理にきまつてらあ。」

と、人夫は斧をおろして、肩をたゞきながら、

「こゝに働いてゐる連中は、みんないづばしな身體だから、この仕事位はなんでもねえことだし、それに社長の加島さんてえ人あ、よくみんなをいたはつてくれるから、誰も心から有難てえとよるこんで、苦を苦ともしねえ譯だが、お前なんぞには、たしかにひでえ仕事にやあぢげえなからう。ほんたうに、苦しい時あさうやつて休むがいゝよ。時によりやあ、仕事も助けてやらあ。」

「……………」

「だが、お前も、こんなとけえ送つてよこされたにやあ、さだめて話になるやうな筋があんだらうな。お前、そんなに好い男つ振だから、女出入りだ。……え、その男つ振ぢやあ、女がすてちや置かねえや。道樂のありつたけをしつくしたあげくが、お定りの金に詰つたつてえやつだな。こいつあ圖星だらう。はゝゝゝ。」

「……………」

「え、どうしたんだ。お前……金につまつたが、なんといつても親がかりの身でどうにもできねえ苦しまぎれに、家の金庫をこち開けたつてえやつか。それとも……」

博巳はグツと上半身を起した。

「失敬なことをいふな！ 僕は盗みなんか卑劣なことはいしないぞ。」

「はゝゝゝ。まあ、そんなにムキになるもんぢやあねえ。……だが、こゝは、そんなことをいつたつて通らねえよ。こゝに働いてゐる人間は、窃盗や強盗はもとよりのこと、人の二三人を斬つたつてえ、てえした野郎ばかり揃つてゐるのよ。おれなんぞも、二度まで喰え込んだ前

科者よ。まあ、そんなことあ威張れもしねえ話だが、そんな仲間のゐるところへ送つてよこされるにやあ、お前だつて、なんか相當の事あしたにちげえねえ。こゝちやあ、みんな兄弟だ。お互えの身の上あ明しあつてゐるんだ。……え、お前、なんにも隠すにやあたらねえ。悪い事あしても、かうしてちやんと眞面目に働れえて、その日の汗で、その日の食しよくにありついでるんだから、今あ清淨潔白な、誰の前に出たつて恥ることのねえおれ達なんだ。月に一度の休みの日は、社長さんをはじめみな宿舍にあつまつて無禮講がはじまるんだが、その時の社長さんのお話あ、ほんたうに嬉しくなるぜ。……さうだ、その休みも明後日あさうだが、まあお前そこへ出て見ねえ、そんな兇狀持の連中が、ほんたうに楽しさうに、社長さんを取り巻いて、薬を出すやら踊るやら、そりやあ面白れえ。まあ社長さんが親父で、みんな仲のいゝ兄弟さ。なんの隠しだてもなく、まつすぐな心持じつきあつていくんだ。お前も、いゝ家の息子なんださうだが、こゝにゐる仲間だつて、以前むかしあ立派な身分だつた人間もあるんだ。だが、かうして働れえてゐる以上は、誰の間にも差別へだはなしだよ。みんな仲のいゝ兄弟といふだけだ。相談にも乗り、智慧も借し、これからほんたうの眞人間になつて、立派に生涯を送つてゆかうといふんだから

それでいゝちやあねえか。盗みをしねえといふんなら、お前、どんなことをしたんだ。え？」

「どんなことをしやうと、君達に訊かれる必要はない。」

博巳は不快げに口を噤つぶんだ。

「……さうかね。」

と、人夫は笑つたが、

「しかし、お前、まだこゝへ来て半月とならねえから、こゝの氣風や申合せつてものを知らねえんだらうが、さう威張つて、結局ひとりぼつちになつちやあ損だぜ。え、郷に入らば郷に従へで、みんなと朝夕、ひとつ釜の飯を食つてゆく以上は、どこまでもみんなと心持をあはせていかなきやあなんにもならねえ。……え、いゝかえ。誰に憎まれても損だ。また、こゝに働れえてゐる仲間あ、今もいふとほり、加島さんを社長といふよりあ親父だと思つて、仲よく笑つて暮してゐる兄弟なんだ。樺太ちうの木材會社で、これほど氣持のしつくりして、面白く働けるとかあねえといはれてゐるんだ。いつかも臈の役人がやつて来て、みんなの働きつ振を見て驚いて、模範村だつてほめて歸つたほどなんだ。そりやあ、以前むかしが以前で、氣の荒れえ連中の

ことだから、時たま喧嘩のひとつや二つ起らねえとたあねえんだが、加島さんが来てお留めなさると、ひと聲ですぐ鎮まつてしまふんだ。そしてもうすぐ笑つて手を握りあふんだ。加島さんが、この仕事を始めて、人夫にこちらばかり使ふと聞いた時、世間じやあ、恐ろしい前科者ばかりの寄合だからと、氣味わるがつてゐたさうだが、今じやあ加島さんの會社で働れえてゐたと聞きやあ、樺太のどこだつても、却つて安心して雇つてくれるのだ。……な、こんなわけだから、お前も、みんなと氣をよくつきあふがいゝんだぜ。」

「僕あ、君達と兄弟になつて働くつもりでこゝへ來たのぢやないのだ。」

「そりやあいけねえ。お前、そんな心でゐちやあいけねえ。お前は、どんな生れの間か知らねえが、そんな身分や氏素性なんざ、こゝちやあ通らねえ。ここで働れえてゐる者あ、みんな一列一體だ。みんな兄弟だ。そんな心あ棄てなくつちやいけねえ。こちやあ誰も素つ裸の交際なんだ。そこが面白え嬉しいとこなんだ。みんな兄弟だ。——加島さんは、いつもさういつて、おれ達を戒めてゐなさんだ。」

「僕はひとりぼつちで澤山だ。」

「はゝゝゝゝ。まだ半月ばかりぢやあ、加島さんのえれえところも、みんなの嬉しい氣分も、お前にやあわかるめえ。だからそんなことをいつてゐるのだ。」

——また一人、樹蔭から、斧をかついだ人夫が通りかゝつた。

「おい、中山、なにをしてるんだ？」

「あゝ、堀田か。なあに、この兄さんとちよつとお話しよ。」

「ふむ。」

と、堀田と呼ばれた人夫は、妙な眼で博巳を見たが、

「この男あ、こちとらが挨拶の言葉あかけても、ろくたま聲も返さねえのだが、それでもお前たあ、なんか話したかな。」

「なあに、おれも、いまちよつと聲をかけたら叱られつちまつた。」

相恰に似合はず、どこか人の好きさうな中山は頭を掻いて笑つた。

「叱られたつて？ ふん、お前、なんていつたんだ？」

堀田は、日に焼けた角張つた顔を、また博巳のはうへむけた。博巳は黙つてゐた。

「なあにね。おれがこの兄さんに、どうしてこゝへ送られて来たか譯を訊いて見たんだあな。」
「それで叱るつて……へい？」

と、堀田はやゝ嘲けるやうに、

「こゝちやあ、誰だつて威張ることあできねえのだ。いくら華族の息子だつてもな。」

「へつ？ なんだつて？ 華族さんの息子？ ……おれあ、いゝ家の息子たあ聞いてゐたが、華族さんの息子さんたあ知らなかつた。」

中山は眼をまるくした。

「うむ。華族の息子だつていふことだよ。東京で、浦部子爵つていやあ、なんでもえれえ勢力をもつてゐるんださうだ。この男あそのの息子だつてえ話だよ。だが、どんなにえれえ家の人間だつたも、こゝへ來りやあ、話あ別だ。こゝあまつたく別の世界だ。子爵がこゝやくだつても、驚くにやああたらねえ。みんな平等の兄弟だらうちやあねえか。」

「それもさうだな。」

「さうだとも。」

と、堀田はクンと鼻を鳴らして、

「こゝは社長さんもいつてゐるとほりだ。組頭や、取締なんて名こそあれ、そりやあ別にこの會社でこせえた役目ぢやねえ。みんなおれたちが自然にその人間にそなはる徳分から委した役目なんだ。いや社長つて名も、加島さんは自分でさうは思つてゐねえ。加島さんは、みんなと同じに、働きてえといつてゐるのを、おれたちが、それぢやあ濟まねえといつて、無理に社長さんてえ地位に据ゑたんだ。こゝはそんなとこなんだ。それがこゝの自慢になつてゐるんだ。誰も彼もお前おれで交際つてゆく仲のいゝ兄弟なんだ。」

「さうだよ。さうだよ。まつたくその通りなんだよ。」

と、中山も首を振つて、博巳に眼をやりながら、

「……だからの、おい、兄さん、お前、ほんたうに、みんなと心置きなく笑つたり話したりしねえぢやあいけねえよ。え、いゝかね。」

博巳は應へなかつた。

「おい、兄さん、ほんたうに、お前、ひとりでやつてゆけばいゝと考へてゐたつて、それぢ

やこゝに一日もゐられねえよ。」

「おい、中山、この男あ、ちつとも返事をしねえで黙つてゐるが、どうしたつていふんだい。」

「うむ、それがの。この兄さん、おれ達たあ兄弟になりたくねえらしいのさ。」

「なにつ？ おれ達たあ兄弟になりたくねえつて？」

堀田は、グツと博巳を睨めつけた。

「おい、浦部さん、そりやあほんたうかえ？」

「僕は、盗みなど、恥知らずの眞似はしたことはないんだ。」

博巳は傲然といつた。

「なにつ？ 恥知らず？ ——おい、生意氣いふな。そりやあ、おれ達はみんな前科者よ。だが、にゝに働れてゐて、加島さんの教へを受けて眞人間になつたからは、恥も知り、罪も悔いた人間なんだ。おれ達兄弟は、みんな生れかはつたまともな立派な人間なんだ。誰の前へ出たつても、恐れることあねえ。なにが恥知らずだ？」

「君達のことをいつてるのぢやない。この男が、僕に盗みでもしたかと訊いたからいふのだ。」

「ふむ、盗みはしねえでも、お前ほどの生れのものが、かうしたとけえ送られて来たからにやあ、まんざら恥にならねえことをしたわけでもあるめえ。……まあ、そんなことあどうでもいゝ。浦部さん、お前は、みんなと兄弟にやあなりたくねえつていふのか？ お互えに助け合つてゆきたくねえつていふのか？」

「僕は、誰にも助けて貰はうと思つてゐない。僕はひとりで澤山なんだ。」

「ふむ、そんなことをいつてる癖に、お前、そんなに、すうかり仕事でへたばつてゐるぢやあねえか。」

中山は笑つた。

「へたばらうとへたばるまいと、君達の知つたことぢやあない。はゝゝ。」

博巳は負けずに笑ひ返した。

「おい、兄さん、そいつがいけねえ。お前、そんなことをいふからいけねえ。社長さんは、こゝの仕事は、一人一人の仕事でねえ、みんなの仕事だ。みんなが力をあはせてやつてゆく一つの仕事だつていつてらあ。な。いゝかえ。各自てんに斧を振りあげてはゐるんだが、その斧の響き

は一つにまらねえちやあいけねえつて、教えてくだすつたんだ。みんなの心が一つになる時に、斧の響きが一つになる。そして森の仕事が一つになるつていふんだ。な。いゝか。だから、お前、仲間つばづれになつちやいけねえ。一人の心でも離れちやいけねえ。こゝちやあ、ひとりで澤山だてえこたあいつちやあならねえ。盗みをしたかつて、おれの訊いたのが氣に觸りやあ、おれああやまる。」

中山は、こゝみながら、博巳の肩に手をかけた。——が、不快げに博巳は、その手を振り拂つて、彼方を向いた。

「おい、どうしたんだい？ 兄さん。なにもそんなに怒ることあねえちやねえか。みんなと仲のいい兄弟になんねえよ。」

言葉をかはすのも嫌だとはかり、博巳はまたベツと空唾を吐いた。

——と、中山を押しつけるやうにして、堀田がズツと博巳の前に立つた。

「おい。浦部さん。お前、なぜ返事をしねえんだ。中山が、こんなに親切にいつてることが、お前にわからねえのか。」

「……………」

博巳は相手にならなかつた。

「おい、なんとかいひねえ。お前は、おいらと口をきくのが、身分がちがつてゐるてえんで面白くねえつていふのかい？ おいなんとかいひねえな。仲間つばづれであつてえ了簡なら、それでいゝ。こつちもお前がどうならうと、打棄つて置くぶんのことよ。」

「あゝ、打棄つといつて貰ひたい。」

博巳は、なにがなし、睨め返した。

「……ふむ、さうか……さういふ了簡であるなら、お前がへたばらうと、病氣になつてベソをかゝうと、今後、みんなにいつて、誰にもお前を助けてやらうたあしねえから、そのつもりであるよ。」

「それで澤山だ、僕は僕ひとりでやつてゆく。」

「ふむ、いゝ覺悟だ。おい、中山、こんな野郎にやあ、もう構はねえがいゝ。こいつあ、華族つてえことを鼻にかけてゐやがるんだ。おれ達と交際つちやあ、身分にかゝはるとで思つてゐ

やがるんだ。おれあれから、社長さんに會つて、こんな野郎がぬちやあ、こゝの折解の團結も駄目になるつてことをいつてやる。この會社にこんな野郎を置くこたあ、おれ達の恥だ。」

憎さげに堀田は嘗つたが、博巳は知らぬ顔をして、低く口笛を吹いてゐた。

「まあ待て、堀田。」

と、中山は おとなしくとめて、

「……おい、兄さん、お前、ちいつと了簡ちげえだぜ。お前にやあ、人間の眞心と、眞心の交際つてものがわからねえのかね。お前はこちとらとちがつて、學校へも行つた男なんだらう。人間が、お互えの意氣つてもんで、美しくつながら合つてゆくことが、どんなに有難てえ、嬉しいもんか……そこんところを、わかってくれさうなもんだにな。」

「おい、中山、もうなんにもいふな。この野郎に、そんな涙の出るやうな人間の意氣なんてもなあわかりつこねえ。」

「さうかも知れねえな……だが、こゝで仲間つばづれになつちや、みんなに憎まれるばかりでほんたうに損だがな。」

「おい、もう相手にしねえで置け。身分の學問のと鼻にかけやがつて、小生意氣なことをぬかす野郎は、ここに働れえてゐる誰だつて承知しねえ 第一、この堀田が承知しねえ。わからねえ野郎は、わからねえ野郎だけの扱けえをしてやるぶんのことだ。——おい、浦部さん。それでいゝんだな。」

博巳は飽くまで、返事をしなかつた。

「……おい、浦部！ それでいゝんだな？」

やゝ氣組んでズツとそばへ寄る堀田を、中山は心配らしく遮りながら、

「堀田、もういゝやな。ゆかうよ。」

「まあ、待て、この野郎に、もう一言ひとこといつてやりてえんだ。」

「お前、相手にしねえで置けといつたぢやねえか。ほつとくがいゝんだ。」

「わからねえ野郎だから、わからねえ野郎だけの扱けえるしてやりてえんだ。——おい、浦部！ それでいゝんだな？」

「それでいゝ。」

博巳はうるさげにいつた。——と、その言葉の終るか終らぬかに、堀田の拳は、ピシリと彼の左の頬に飛んだ。

「あつ！ なにをするつ！」

博巳は跳ね起きた。

「わからねえ野郎だけの扱ええをしてやつたんだ！ わからねえ野郎にやあ、これを喰はせるが一番だ。はゝゝ。」

「失敬なつ！」

猛然と、博巳は堀田の襟首を掴んだ。

「おや、この野郎、おつな眞似をしやがるなつ！」

堀田も、博巳の手を逆に取つた。

「ま、ま、待て！ 堀田！ そ、そんなことをしねえでも……」

中山は驚いて間に入つた。

「打棄つとけ、中山！ こんな野郎は、どせう骨を敲つくちいてやらなくちや、ためにならぬ

え！ この森のためにならねえ！」

「なにを！ 失敬なつ！」

博巳はグンと體をつきつけるなり、足拂ひにかけて堀田を地びたへ捻ぢ伏せようとした。

「おや、洒落た眞似をしやがる。この野郎！」

「なにを！ 失敬な！」

「えゝ、この野郎！ 下手に怪我あしやがるなつ！」

「よくも僕を撲つたな！」

こんどは博巳の拳が、堀田の耳の上に飛んだ。

「うぬ、やりやがつたな！ もう容赦しねえぞつ！」

「なにを！ 畜生！」

「うぬ、うぬ、この野郎！」

兩人は、組み合つたまゝ、ころがりまはつた。拳と拳とが飛びちがつた。

「おい、おい、やめるつ！ 喧嘩なんかしねえでも……おい、おい、やめるつ！」

中山は、いよ／＼驚いて、兩人を引き離さうとした。

「畜牛！」

「この野郎！」

組んづほぐれつ、兩人は砂まみれになつて争ひつゞけた。

「どうしたんだ／＼？」

「や、喧嘩だ／＼！」

「誰が喧嘩をおつはじめたんだ？」

「おう、堀田と新米の若造だ！」

四五人の人夫が、樹の間から駈出して來た。

「おい、みんな手傳つて、分けてくんよ！」中山は息をきつた。

「打棄つといてくれ！こ、この野郎、生意氣だから、おれがやつつけてやるんだ。」

堀田は博巳の喉を締めあげようとあせつた。

「まあ／＼、待て／＼。」

「そんな手荒なことをしねえでも……」

人夫達は、中山に手をかして、堀田と博巳を無理やり引きわけた。

「打棄つとけ！こんな野郎、思ひ入れぶつ挫いてやらなくちや癖になる！」

「おい、どうしたつてえんだい。こんな若造にそんな眞似をして……いつもの堀田らしくもねえ……」

「いつてえお前、なにをしたんだ？」

人夫達は、前後からさ／＼へながら、堀田と博巳に訊いた。

「なに、この野郎がおれ達を馬鹿にしてやがるのだ。」と、堀田は強くそつちを睨みつけて、「この森で働く者あ、みんな兄弟だ。なあ、さうちやあねえか……一心同體の兄弟なんだ。それをこの野郎は、仲間つばづれをして、兄弟交際は御免だつてやがる。野郎、身分とか學問とかを鼻にかけやがつて……」

「ふむ、そんなことをいつたのか。」

「そいつはよくねえや。」

「この森で働く者あ、みんな上下のねえ兄弟だつてこたあ、こゝへ来ると、社長さんから難でも言ひ渡されてゐる筈だが……」

みんなの眼が、険しく博巳の身にそゝがれた。

「なあ、さうだらう。」と、堀田は勢ひを得たやうに、「だから中山とおれとで、いろんな言つて聞かせてゐるのに、こいつあ、ふてぶてしく外方を向きやがつて、ふゝんて調子で、耳も借さねえ。あんまりわからねえ野郎だから、おれがわかるやうにしてやらうと思つたの上。」

「さうか、そいつあいけねえな。」

「どうしてわからねえんだらう？」

「なんでも身分のある家の息子だから、氣をつけて助けてやれつて、社長さんからも話されてたが、こゝへ来て、そんな心持でゐるなあ、そりやあよくねえ。」

人夫は口々に堀田に味方した。

「やい、野郎！ これでもまだわからねえのか！」堀田は督つた。

「僕はひとりで澤山だ。僕は身分のなんのと考へてゐはしない。だが、君達と仲間交際はでき

さうにもないから、断はつたまでのことなんだ。」博巳は冷笑した。

「なにっ！」

人夫達も、さすが色をなした。

「あ、社長さんが来られた。」

——その時、中山は叫んだ。

堀田も、人夫達も振りかへつた。

——もう、五十を五つ六つは越えてゐるらしい。左右の髪には白いものを混へてゐるが、肩から胸へかけて岩乗さを見せた骨格。日駒んだ眉宇に、或る精悍な意志をみなぎらせながらも鬚を浅く刈り込んで、やゝ厚味をもつた唇には、どこかおだやかな情愛をたゝへてゐる人物。

質素な詰襟の洋服で、帽子もかぶらず、静かにあゆみ寄つて来る。——この山林業を經營する加島社長であつた。

中山も堀田も人夫達も、叮嚀に頭をさげた。

「どうしたのだ。」

彼は會釋を返しつゝ、引きわけられた堀田と博巳の間に立つた。

「どうしたもかうしたもねえんで……この野郎、あんまりわからねえことをいやがるもんですから……」堀田はまだいきり立つてゐた。

「まあ、堀田。」

と、手をあげて制して、中山は簡単に、この場のいきさつを説明した。

「ふむ……」加島社長は、腕組みして、博巳の顔を見たが、「さうかね。それはよくないことだ。浦部君にはこゝのみんなの氣持をよく話して置いたのだが、わたしの言葉がまだ充分徹底しないと見える。これはわたしの手落ちかも知れない。なほよく話すから。堀田君も、今日のところは、わたしの手落ちとして、ゆるして置いてくれたまへ。いや、浦部君は、大學にもゐた人だし、話のわからん人ぢやないから。」

「なに、社長さんからそんな言ひ譯されちや、あつし違あほんたうに恐れ入るんです。社長さんに手落つてことあねえ。」と、堀田は率直に折れて、「たゞね、みんな兄弟になつてゐるのにこんなことをいふ人間が一人でもあつちやあ、この森の、この加島木材會社の面目玉にかゝは

りまさあ。ねえ、社長さん。あつし違あ、眞人間になつたんだ。眞人間となつたからにやあ、誰とでも人間同士の交際ができる筈なんだ。ねえ。社長さんはいつもあつし違に教へてくださる。人間と人間との交際にやあ、美しい清い心さへありやあ身分の學問のつてえ差別はねえ。

人間は柄や形で繋るものではねえ。心と心で繋るんだつて——ねえ。だが、この野郎は——」

「堀田君。野郎といふ言葉は廢さうぢやないか。」加島社長は笑つた。

「え。」と、堀田は頭を掻いて、「え、つい、腹が立つてゐるもんですから……で、この浦部さんがあつし違と兄弟になりたくねえつていふ心持あ、あつし違が兄弟になる資格がねえつてわけなんでせう？ つまり、あつし違の心を、この人あ認めてくれねえんだ。そいつが口惜しいんだ。社長さん、どうぞよくこの人にあなたから、あつし違の心持を説いてやつてください。」

「いや、よくわかつた。わたしからもよく浦部君に話さう。」

「社長さん。こりやあ、あつしも悪かつたんで……」と、中山も言譯するやうに頭を掻いて、

「あつしがね——ついこの浦部さんに、こんなとけえ送つて來られるからにやあ、女つ狂ひでもして、金に詰まつて家の金を盗んだのか——なんて訊いたもんですが。」

「そりやあ、お前、すぐ浦部さんにあやまつたからいゝぢやあねえか。」堀田は中山をかばふやうにいつた。

「まあ、すべてをわたしに委してください。よく浦部君にも話すから。」に、加島社長は笑つた。「誤解がとければなんでもない話なんだ。……おう、すつかり日が暮れた。早く寄宿舎へ歸つて、夕飯にしたまへ。今夜は賄に鯿をうまく煮つけさせて置いたよ。はゝゝゝゝ。」

とほいとほい、博巳さん。——あなたのおいでのところを、今日やつと知ることができましたの。いそいでこの手紙を書きますわ。

ほんたうになにからさきにお話していゝか、おわかれしてからの二ヶ月の間、わたしの心の悲しみと苦しみ——

わたしは、なんと檜町のお邸やしろの前をあるいたことか知ら？ あれからあなたの身の上がどんなになつたか、そればかり心配している／＼におたよりを知らうとあせりました。しかしお邸のなかへ一步も入れることのできぬわたしですもの。どうする事もできないので

す。——あなたが、御無事で樺太にゐらつしやることが、やつとの事わかつた時、わたしは、ほつと胸をなでおろしましたけれど、すぐまた言葉にいへない心細さがわきあがつて泣いてしまつたのよ。なぜわたしにたよりをくださらないのか、うらめしいお心だと思ひます。あの、おわかれした晩、どんなことがあつても、會へる時機 來るのだから、安心して待つてゐると仰つた、そのお言葉ひとつをたよりに、かうして毎日、あてもない日をつらく送つてゐるわたしの心をすこしは察してくださいませ。——いつ頃までその地においでなさるのですの。いつになつたら、お目にかゝれる日が來るのでせうね。それを知りたく思ひます。

今日、ある雑誌に樺太のことが書いてあつたので、その記事と寫眞を一せうけんめいによみました。大きな森や、いつばいに材木をながしてある川や、雪のつもつた廣い野原や長い竿にかけて乾してある何千といふ罫——そんなものを見ました。十月頃から雪が降つて翌年の五月頃まで、七ヶ月の間は、雪と氷に人々は戦つてゐるのだと書いてありました。いつも霧が深くとちこめて、交通も充分でないと書いてありました。なんだか、それ

だけ讀んでも、泣けて來ましたわ。

聞きますと、あなたは山の麓の大きな森で、斧をもつて、働いておいでなのですつてね。あなたのおからだは健康でせうけれど、今までとはあまりにはなれた生活が、どんなにお苦しいことか？ あの晩のことで、お父様が罰としてのおはからひとは思いますが、あんまりひどいしかただと、なさけなくて、また新しい涙がながれますの。かうして、この手紙を書いてゐながらも、わたしは、胸がせまつて、幾度ベンをおいたか知れないわ。行つていゝのなら、わたしも、どんなにでもしてあなたのところへゆきたいのです。しかし、今の、さうしたお身の上に、わたしがゆきましては、一層御迷惑だとおもふので、せき立つやうな心を、無理にも押ししづめてをりますのよ。

博巳さん——わたしはいつまでも、あなたにお會ひできる日を、まつてゐますのよ。あなたもきつとわたしのこの心をお忘れくださるまいと思ひます。どうぞ、おひまのせつ、葉書でもいゝから、おたよりくださいまし。その日をせめてもの楽しみに、これでおきます。くれぐれもおからだをお大切に。——

麻知子

博巳はポケットから取り出したこの手紙を、幾度か讀みなほして、ジツと樹に背をもたれながら考へてゐた。

——さうだ。麻知子とわかれて、もう二ヶ月になる。ここに送られてからの自分は、二三度姉の思ひやりの深い、慰めと注意の言葉にみちた手紙を受取つたほかは、誰からも消息を受けなかつた。東京での氣儘な放縱な生活——それにひきかへて、この汗みづくの辛い労働——一日と、不平不満が起る。ともに語るべき仲間はない。あまりに無智であり粗野である。かうした人間のなかに、自分が心をゆるして入り込んでゆけるものか！ もとより自分は世間並の身分名譽などを蔑視してゐる。すくなくとも重んじてはゐない。ゐないけれども、あの無智と粗野を忍んで、互に肩を敲きあふほどの氣にはなれない。彼等はなんぞといふと、兄弟と呼びかける。彼等自身こそ兄弟の心を持ってよう。しかし、自分と彼等とは、性情から品位まであまりに相違がある。相容れない。彼等が神のやうにも尊敬してゐる、あの加島といふ社長の性格——それはさすがに彼等とはちがつて、どこかに人を魅する恩愛と素朴さをもつてゐる。だが、それはたゞ自然から切り取られたやうな、愚直にも近いもので、自分の眼から見れば或る水準

を抜いた平凡人といふにすぎない。こんなところへ自分を送つて、自分を矯正すつもりである父の了簡もわからない。誰が、何年こゝに置かれたつて、どれだけの感化を得るものか。あまり馬鹿にしてゐる！——この勞働の體驗が一生の自分に、どれだけの効果がある？　あまりに馬鹿々々しい。

——博巳は、いつしか、また例の腹立たしい氣持になつた。彼はこの手紙を読んで、或る哀愁的な、シンミリした感情に浸りかけたのではあるが、その感情がわいて、東京の灯のなつかしさを眼にうかべると、こんなところへ、陶冶の黨育のといふ名で送りつけた父母の心を恨めしいと思ひ、またこゝに働かせて、平凡過ぎるほど平凡な道義の言葉をかけつつ、いつばし自分を感化するつもりであるらしい加島を愚かしいと思ひ、聲をかけるものも不快な人夫達に妙ないたはりがましい兄弟面をされるのを、忌々しいと思ふのであつた。

「……や、浦部さん。物おもひかね。今日、この寄宿舎の郵便受へは、めづらしく優しい封筒が舞込んだので、みんな大評判よ。え、おやすくねえぜ、兄弟。いつてえその女あ、どこの嬢さんなんかね？」

背のひくい、眼の頓狂に大きく飛び出してゐるところから、「海豹」といふ仇名で呼ばれてゐる、仲間ぢうでの愛嬌者の人夫が、いつの間にかうしろに立つて、彼の肩からのぞき込むやうに笑つた。

博巳は、黙つて手紙をポケットに突込んだ。

「えへへへへ。こゝにもあわてゝ隠すこたあねえやな。第二宿舍の者あ、みんな知つてゐるんだよ。——この森へそんな優しげな女の手紙が來たつていふなあ、まづ開闢以來だらうつてえんで、今朝あみんな、お前さんの手に渡るまでに、恭々しく拜見したんだぜ。なかにやあ、封筒を嗅いだり嘗めたりする奴も出る騒ぎさ。なんでも今夜あ、消燈前の休みの時間に、内容の文句を一行のこらすお前に讀ませて、胴あげしようぢやあねえかつていつてゐる者もある。ほんたうに、えれえ前景氣なんだよ。はつ、はへへへへ。」

博巳は腹立たしげに、舌打ちした。

「人の手紙をそんなことするとは、失敬な奴等だ。」

「いや、さうムキになつちやあいけねえ。なにも岡焼半分に、お前をからかほうてのぢやねえ。」

つまり、そのおよろこびよ。つまりその……」と、海豹はキョトンとした眼を笑はせて、「お祝ひ申してえのよ。お祝ひ——むつかしくいつて、なんとかいつたつたかな？ ろむ、祝福よ。その祝福よ。大いに浦部さんを祝福しようつてのよ。え、どうだい？ なあ、お互げえに、かうして兄弟同士なんだから、よろこびも分けあふし、悲しみもわけあふんだ。その心持でいつてるんだ。悪くとつちやあいけねえ。」

「僕は、君達になにも祝福して貰はうとは思はない。人の手紙をみんなで持ち廻るなんて失敬千萬だ。」博巳は憤慨した。

「おい、浦部さん。お前、駄目だよ。こんなことで怒つちやあいけねえぜ。こゝに働れえてゐる者あ、みんなザツクペランの交際つぎあひなんだから、お前も、今夜あ、すつかりのろけてやるつもりで、みんなの前で大聲に、その手紙を読みあげるがいよ。——そのお嬢さんは、さぞ美しいお嬢さんだらうな？ ——いつてえ、どんなことが書えてあつたんだ。東京で、お歸りの日を待ち暮らしてゐるのでござえますつて奴だね。え？ そいつだけは確に當つてゐるだらう？ は……は……。」

「……………」

「おい、浦部さん。なんとかいひねえな。今夜あなんといつても、みんなの前で讀まさずにはあ置かねえんだが、その前に、ちよつとおいらにだけ、よくつて耐たまらねたとこを、内證うちしるしでちよつと賞翫しょうくわんさせて頂きてえね。」

笑ひながら、突き出す海豹の横すつぽに、突然、博巳の拳が飛んだ。

「煩わづらさいつ！」

「——あつ、痛え！ な、なにも、撲ぶたなくつてもいよぢあねえか。」

「煩わづらさいからだ。」

「煩わづらさけりやあ、煩わづらさいつて、口でいつてもわかることだ。おい、お前はまだ新米でこゝの規則あ知るめえが、この森ぢやあどんなことがあつても、そんな暴力はゆるされてゐねえんだぜ。」

「暴力ぢやあない。いくらいつてもわからないから、わからせるやうにしてやつたのだ。」

「な、なんだと！」

「わからない奴にやあ、これよりほかしかたがない。」

「うぬ、生意氣な！ 若けえ奴だと思つて、我慢してやつてりやあ、そんなことをいやがるのか。やい、手前は、二三日前も、中山や堀田と喧嘩あしたつていふが、手前こそ、みんなの心持がわからねえんだ。よし、おれも手前に、わからせるやうにしてやる！」

海約は、血相變へて、猛然と飛びかゝつた。

——たちまち、はげしい拳と拳とが、博巳と海約との間に撃ちかはされた。

「や、喧嘩だ〜！」

「誰だ〜、この森で喧嘩なんかねえ筈だが。」

「海約と、あの、華族の息子つてえ野郎よ。」

「また浦部つてえ奴か。つい二三日前も、野郎、堀田や中山と喧嘩をしたのぢやあねえか。」

四五人の人夫が、聲を聞きつけて、バラ〜と樹の間から走り出た。なかの一人が留めようとすると、その他が矢庭に遮つた。

「おい、待て！ こいつがこの森へ来てから長い間一度だつて起らねえ喧嘩が二度も起つたのだ。もうとめるにやあ及ばねえ。このまゝへたばるまでやらせて見る。やい、海約！ 容赦す

ることあねた。思ひ入れやつつける！」

「みんなかうして兄弟であるこの森の有難てえところが、こいつにやあわからねえんだ。そんな奴あ、みせしめのためにやつちまへ！」

口々に彼等は、博巳を取り巻きながら罵つた。

「なにっ！ 僕をやつつけるんだと？ は〜、面白い。やつつけるならやつつけて見る。」

博巳は肩をひいて、身構へするやうに、せ〜ら笑つた。

「うぬ！ まだそんなことをいひやがるか！」海約は躍りかゝつた。

「やつつける！」

人夫達はどなつた。拳が、博巳の四方から兇暴に襲ひかゝつた。

「なにをっ！」

「畜生っ！ これでもか！」

「疊んじまへっ！」

嘲罵と叱聲が、高くはげしく入りまぢつた。——四五分の後、博巳は地びたに、泥まみれに

敵き伏せられてゐた。

「さあ、いくらでも撲れ！ 貴様達にやつつけられる僕ぢやあないぞ！」彼は叫んだ。

「まだ世迷言をぬかすかつ！」

「こいつの口の利けなくなるまでやつつけてやれ！」

「この野郎！」

「この野郎！」

拳は更に雨のやうに、博巳の顔、胸、手足といはず降りそゞいだ。

「なにをつ！ 負けるものか！」

猛然と、博巳は跳ね起きた。——かと思ふと、彼はそこにあつた斧を掴んで振りあげた。

「さあ来い！ 僕の口が利けなくなるか、貴様達の身體が利けなくなるか！ さあ、やれるまでやつて来い！」

さすがに、人夫達は驚いて身を退いた。

「あつ、危ねえ！ 兄弟、氣をつける！」

「こいつ、飛んでもねえ眞似をしやがる！」

海約は叫んだ。——彼も斧を握つて立つた。

「兄弟、みんなのいてゐてくれ！ おれ一人でやつてやる！ 森のためだ！ みんなのためだ！ おれ一人が罪を背負へばいゝんだ。こいつの息の根をとめてやるから見えてゐるつ！」

人夫達は、いよゝ／＼驚いた。

「海約！ 危ねえつ！ ま、待て！」

「いゝや、うつちやつといてくれ！」海約は息をはづませながら、「この喧嘩はおれが基だ。手前達に迷惑はかけねえ。おれ一人で處置をつける！」

「ま、待て！ そんなことをしねえでも、このことを社長さんにいへばいゝのだ。そして、この若ん造を、この森から追ひ出してしまやあ事あすむんだ。」

「なに、それぢやあおれの腹が癒えねえ。こんな生な野郎に、馬鹿にされちやあ兄弟の名折れだ。おれがひと撃でやつつけてしまふ。おれ一人がその罪をひきうけりやあいゝんだ。うつちやつといてくれ！」

「危ねえつ！ 海豹！」

「うんにや、うつちやつといてくれつ！」

両手をさゝへられながら、海豹はいたづらにもがいた。

「待て！ 待つてくれ！」

——その時、彼等のうしろから、鋭く制する聲がした。

「おゝ、社長——社長さんだ！」

人夫達は、海豹を圍んだまゝ、また二三歩さがつた。

質素な詰襟服に身を包んだ加島社長が、大股に博巳と彼等の間に立つた。

「社長！ ゆるしてください。あつしはこの森をこんなにお騒がせいたしました。だが、あつしはどうしても、この森の兄弟達のために、ほうつて置けねえことがあるんです。」

海豹がいほうとするのを、加島は手をあげた。

「いや、なんにもいはないでもわかつてゐるから、君達はどうかこのまゝ、すべてをわたしにまかして行つてください。決したわるいやうにははからはない。とにかくわたしになにこもま

かせて置いてください。」そして、彼は博巳に向つて、「浦部さん。わたしはあなたにお話がある。たしの部屋まで来て貰ひたい。」

「……………」博巳は黙つて、たゞ冷やかに笑つた。

人夫達は、その態度を憎々しげに見やつた。なかにも海豹は、またなにかいはうとした。

が、加島はおだやかにまた手で制して、

「さあ、浦部さん。とにかくわたしの部屋まで来て貰ひたい。」

「行きませう。」

博巳は斧を肩にした。彼は加島の背に、いかにも反抗的な、不遜な眼を投げた。

——森のはづれのバラック建の三棟の宿舍——その最右端に、四五間はなれて小さな木造の事務所があつた。加島はうしろも振向かないであるいた。

「おはゝり。」

加島は、事務所のドアを開きながら、呼んだ。べつに急ぐでもなく、ことさらに落つき拂つ

て博巳はドアに近づいた。

「……ちよつと、こゝで兩人が話さなければならんことがあるから。」

と、加島はそこに、帳簿を整理してゐる二人の事務員にいつた。

「はゞ。」

事務員はペンを指いて、入口に突立つた博巳をチラリと見ると、なにかうなづきながら、すれちがひに出て行つた。

「さあ、浦部さん。その椅子におかけなさい。」

加島は静かにいつた。——黙つて博巳が椅子に就いた時、いつの間にも手にもつてゐたか、加島はそのドアに、内部からガチリと鍵をおろした。

——妙なことをするなと、博巳は思つた。しかし、彼はどこまでも意固地に、冷笑を漏らしながら、斧をドンと床板について、その柄に片腕をさへながら、加島のはうへ顔を向けた。

粗末な木造の卓子を境に、加島は椅子についた。チツと唇を結んで、博巳と相對した彼は、彫りつけられた像のやうに動かなかつた。博巳も、負けぬ氣に、黙つてゐた。

やゝ傾いた午後の日ざしが、厚い雲をかすれて、窓の硝子から、たゆたふやうに射し込んでゐた。

——五分——十分——加島は動かなかつた。物いはなかつた。濃く太い眉を寄せて、グツと眼をつぶつてゐた。

博巳は、なんの眞似だ？ と、いはぬばかり、腹の中でいよゝ／＼冷やかに笑ひながら、斧の柄に、今度は両手を重ねて、グツと頭を押しつけながら黙つてゐた。

「……浦部さん。」

加島は、眼をねむつたまゝ温篤な調子でいつた。

「……」

「浦部さん。」

「……」

「やゝ、二才！ 返事をしねえか！」

突然、低いけれども、鋭く刻ぐるやうな叱咤の聲が、加島の口から迸つた。

——思はず顔をあげた博巳——彼は、そこに、なんともいへぬ凄い殺気をもつて、クワツとひらかれた二つの爛々たる眼を見た。

ガタリと變つた加島の調子——氣を吞まれて、博巳は斧を手からはなした。カタリと柄は床の上に倒れた。

「やい、手前、あんまり悪あがきをしやがると、そのまゝにやあ置かねえぞつ！ このおれを手前、なんだと思つてやがるんだ。見そくなふなつ！」

ドンと、加島は卓子を撃つて、なかば椅子から立ちあがつた。

「みなが森の規則を守つておとなしく出てゐるのをつけあがりやがつて……この森の誰一人だつて、手前のやうな小僧つ子に、しよこ嘗められる者あねえんだぞ！ やい、よくおれを見るつ！ かうして今あ加島慶太郎の本名を名乗つて通る人間だが、二十年以前の北海慶太は八犯九犯と臭え飯の敷を重ねた前科者だ。強盜、放火、破獄——時と場合で人の四五人を斬つたこともある兇狀持だ。ふさげるなつ、野郎！ ——さあ、これからあおれが相手だ。かうして戸口にやあ鍵をかけて置いた。手前とおれと二人つきりでお互げえに加勢はねえ。さあ、やつて

來い。やい、二才！ どつからでも飛びかゝつて來い！ おい、手前のそばにやあ斧がある。そいつを振りまはしてやつて來い！ うぬ等がどうぢたばたしようが、北海慶太の以前に返りやあ、こつちやあ素手一本で澤山だ。相手になつてやる。やつて來い！」

——博巳は、なにをと、強ひて笑はうとした。——が、笑へなかつた。加島の聲は、飽くまで室外へ聞えぬやうにと低かつた。しかし、その響きには、決して威嚇的でない、底強い凄味があつた。なにを！ と、跳ねかへさうとすればするほど、おのづと五體のすくまるやうな恐ろしい戦慄を、博巳はどうすることもできなかつた。彼はいたづらに空唾を呑んだ。

「やい小僧！ この部屋にやあ誰も入つちや來ねえ。手前とおれの二人つきりだ。安心してかゝつて來い！ ——やい、飛びかゝつて來ねえのかつ！」

さういつたかと思ふと、ガタリツと卓子を横に蹴やつて加島の右手はグツと博巳の肩口を押へた。

博巳は、畜生！ と、拳を握つた。——が、どうしたことか、加島の身體から發散するやうな烈しい氣魄は、彼の四肢を痺らせて、堅い鐵の籠でもはめられたやうに、椅子から一寸と動

けぬやうに感じた。たゞ、ハツ／＼と彼の息は短かくはづんだ。

「やい、なんとかいへ！　なんとかいつて見る！」

加島は彼の肩をグンと押した。――椅子ごと博巳は、仰向けにひっくりかへつた。したゝかに彼は床で、後頭部をうつた。

「はゝゝ、弱い奴だ！　さあ、起きろつ！　起きて突つかかつて来い！　その斧を取れ！」
彼の眞上に、仁王立ちになつた加島の姿――

博巳は無念と齒齧みをするよりも、口惜しいとさらに拳を堅めるよりも、なんとも形容のつ
恐かぬろしさにたゞソツとした。眞つ蒼になつて、彼は思はず加島を見あげた。――と、ポタ
リと彼の顔に、なにか熱い滴しじくが落ちやうに思つた。

ハツと見なほした時――

「やい、小僧！　――起きねえかつ！　飛びかゝつて――來、來、來ねえかつ！」

かう怒鳴りつけた加島の睨めおろす凄まじい眼は、一瞬、その語尾の震へるとともに、サツ
と曇つて、そこに苦しげな涙が、一杯に溜つたのを博巳は見た。

「やい、野郎！　――起、起、起きろつ！　――起きて――おれに――飛びかゝつて来い！

――斧を――斧を取つて――飛びかゝつて――」

そのまゝ折り重なつて、息の根もとまれと喉首をしめつけさうに見えた加島の兩手は、いつ
しかガラリと垂れて、聲はもつれ勝ちに、悲しく途切とぎれたのであつた。

博巳は倒れたまゝ、眼を睜みはつた。

「――さあ、なにも――なにも考げえてる時ぢやねえ！　おれに――おれに、飛びかゝつて來

い！　おれが――おれが相手になつてやる！」

涙は、また、ハラ／＼と博巳の顔に落ちた。

「……………」

「起きるんだ――かうして！」

加島は右手を伸して、博巳の右手を掴むと、力まかせにグイと引いた。博巳はやつと倒れた
椅子から起きあがつた。

「――意氣地なしつ！　――おれが――おれが相手になつてやらうと、いつてるぢやあねえか

「っ！」

加島の左手は、また博巳の左手を袈と掴んだ。
兩人は、眞向きに立つた。

「……………」

「……………」

血の氣を失つた博巳の顔に、涙にぬれた加島の顔が、數十秒の間、意味の深い沈黙に、五寸と隔てずたゞジツと見合つたまゝ動かなかつた。

加島は、そこに倒れた椅子を、もの靜かに起した。

「おかけなさい。その——その椅子へ。」加島は指さした。

恐ろしさ——それは、博巳が今までに経験したことのない恐ろしさであつた。そして、この慈愛にみちた優しい言葉——それは、博巳が、今までに感動したことのないほどの優しい響きをもつてゐた。よろめくやうに、博巳は椅子に腰をおろした。ひとことも、彼は物いふことができなかった。

「——浦部さん。あなたには、まだわたしの心がわかつてくれんのだね！」

まつたく、調子の變つた、おだやかな、しかもおごそかな言葉が、加島の口から嘆息するやうに漏れた。

——博巳は、なんとはなしに頸垂れた。

加島は椅子に返つた。

「浦部さん。わたしは一昨日もあなたに——あなたが、あの堀田君と中山君と争つた時に——
いうた。あなたをわたしがあづかること——それは、あなたのお父様から頼まれた。わたしはその任でないから、一應はお断りしたのだ。しかしお父様は是非にといはれる。是非博巳を立派な人間にしてくれといはれる。わたしはそれだけの力をもつてゐないが、あなたのお父様の、わたしを信じてくださる意氣に感じて、あなたを引き上げた。引き上げた上は、どこまでもわたしの責任だ。わたしはあなたを立派な人間にしてお父様にかへさなけりやならん。」——
加島は、ジツと博巳を見た。「浦部さん。あなたは大學の教育をうけた人だ。わたしは、恥かしい話だが、貧乏な親にそだてられて小学校さへも出てをらん。わたしはなんの學問もない。」

わたしのいふことは、あなたの耳にはさぞかしいだらう。つまらんわかりきつたことをいふ人間だと思ふだらう。わたしは世の中のもつかしい理窟を知らない。だからあなたに對してはお説法するやうなことはできない。……だが、わたしは、ちやうどいゝ機會だから、わたしの身の上をお話しようと思ふが、聞いてくださるか？ それでわたしの眞實の心持を知つて貰へればうれしいのだが……」

博巳は黙つてうなづいた。

「おゝ、聞いてくださるか？ それはあり難い。」と、加島は微笑して、「わたしの生れや素性——そんなものは、どうでもいゝ。ただ、今いつたとほり、貧乏な家にそだつたといふだけでいゝ。學校へもロクにゆけず、手習ひひとつできぬ位に、ちひさい時から野ら仕事をさゝれて水呑み百姓の子だつたと思つて貰へばいゝ。それが、十五の時には両親を失つて、それから二年、村の親戚に引きとられたが、こゝでもこつびどくたゝき使はれた。たうとうたまらなくなつて、その家を飛び出した。もう血氣に燃えてゐる時分のことだから、相當の野心もあつた。なんでも東京へ出て、ひと働き働いて見よう。そして自分の身を立てゝ、立派になつて村へ歸

らうと思つた。夢中で東京へ出てからの辛苦や艱難は話すほどのことでもない。わたしは、どうしてわたしがかうなつたかを聞いて貰ひたいのだ。……それから六年七年と過ぎて廿四、五の頃には、どうなり自分に一つの生活らしいものができるやうになつた。わたしは或る商店で年輩からいへば、過ぎたほどの信用を主人から受け、随分重要な仕事をまかされるやうになつた。その時——」

加島の聲は、妙に息を呑むやうに途切れたが、すぐ、碎けるやうに笑つて、

「浦部さん。笑はないでください。この加島にも、その時分はやつぱり人並みの若い心があつた。——わたしは戀といふものを知つた。——はゝゝゝ、はゝゝゝ！」

博巳もおのづから微笑した。

「浦部さん。わたしはいふ。今でもシツカリいひきることができ。その戀は、わたしとしてまつたく眞劍だつた。この年齢をして若いあなたにこんなことをいふのは、いかにもをかしたことだ。しかし、眞劍の話だから、わたしはかういつて恥かしくはない。だが、その戀は——わたしの一生を苦しく淋しいものにさせてしまつた。どうぞ笑はないで聞いてください。」

——硝子窓をかすめる日ざしはやうやく弱くなつた。室内はほの暗くなつた。

加島は、今さら自分の身にしむやうな調子で續けた。——

「……ほんたうにわたしは戀した。その相手がどんな女であつたか、それは今は忘れたことにして置きたい。たゞ、わたしはその女にほんたうの戀をした。……が、その戀には競争者があつた。わたしはその女を得るためには、或る男と争はなければならなかつた。そしてその争ひの武器としては、金が必要であつた。この武器なくしては、わたしは勝を得ることができなかつた。わたしは焦つた。苦しんだ。しかし、わたしの身分として、争ふべき武器を得る力はなかつた。たうとうわたしは、最後の手段をとらなければならなかつた。最後の手段——わたしはわるいと知りながら主人の金を使ひ込んだ。わたしはわたしの第一歩をそこであやまつた。女を得ようとして、わたしは帳面をごまかした。それから、金庫の金さへも盗んだ。それからわたしはどうなつたか？ ……浦部さん。わたしはそこで一年餘も、暗い冷たい監獄に目を送つたのです。」

——加島はゆがんだやうな苦笑をもらした。博己はいつしかジツと聞き入つてゐた。

「……そして、監獄から出ることができても、わたしは、まだその女を思つてゐた。わたしは出獄した日に、すぐ女の様子をさぐつた。その女は、もう、とうに競争者の手に落ちてゐた。

……浦部さん。わたしは若かつた。分別がなかつた。わたしはこゝで立ちなほることができなかつた。わたしの失望は、わたしを更に眞實の勇氣にふりむけてはくれず、わたしを、かへつて自暴自棄に追ひ込んだ。——金だ！ 金だ！ 世の中はなんでも金だ！ どんなことでも金がなければ仕遂げられない。金さへあれば、自分が生命さへ賭けた戀でも叶つたのだ。金がなかつたから、かうした敗北者になつたのだ。金だ！ 金だ！ どうしても金を持たねばいけない。かうして一度汚點のついた身は、今はどこへ行つても使つてはくれない。正直に、じみちに働かうとしても、この刑餘人を容れてくれる社會がどこにあらう。しかも金はほしい。金がなくては人間らしい慾望を遂げることはできない。さうした、眼も心も眩んだ考へから、わたしは恐ろしい罪から罪へ陥ち込んで行つた。——窃盜——強盜——放火——破獄——わたしの荒みきつた生活は、それからはずまつたのです。そして、わたしは九犯といふ前科者になつて北海道へ落ちのび、遂には集治監の厄介者となり、北海慶太といふ仇名さへ世間で呼ばれる身

の上となつた……」

次第に悲痛な調子を帯びて来る加島の物語に、博巳は身を堅く椅子から動かなかつた。

「……浦部さん。わたしはかうした半世をもつた、恐ろしいといふよりも、まつたく愚かな哀れむべき人間だつた。しかも、わたしの兇暴になりきつた心は、自分の犯した罪を悔い恥るよりも、自分をこのやうにまで陥しいれた世間の無情を、責め呪ふやうになつた。わたしは獄務にも服さなかつた。看守や仲間の囚人とも、ほんの些細な癢に觸ることがあると、すぐ亂暴に反抗もし喧嘩もした。さうした時は、血を見るまではわたしの狂暴はやまなかつた。獄内に於ても、わたしは更に幾度罰をうけたか知れない。まつたくわたしは、手のつけられない囚人として取扱はれた。……監獄の教師すらもわたしにはもう一言も諭さうとしなかつた。わたしは結句それをいいことにして、ひとりで威張つてゐた。……ところが、ある日……」強くしづかに——加島の言葉はつゞく——「……ところが、或る日……わたしがいつものとほり、機嫌のわるい不平な顔をして、ブツクサイひながら仕事をしてゐると、加島慶太郎つてのはあなたかれと、自分の前に立つた、ひとりの黒い法衣を着た老人があつた。白い髯を胸まで長く垂れて

瘦せた、黄ばんだ顔をしたついぞ見馴れぬ教師だつた。わたしは黙つてゐると、その人はもう一度わたしの名を聞いた。いかにも慶太はおれだが、それがどうしたんだ。お前さんはなにかおれに説教をしに來たのかね。しかしそれはおれには無駄なこつた。まあやめたがいよ。耶穌の話あおら大嫌いだ。おもしろくもねえ嘘つばちなことをくどくどいつて聞かされたつて、煩さくつて腹が立つばかりだから、そんな話あ迷惑だ。と、わたしはぶつきらばうにあつちを向いてしまつた。するとその老人はたゞ笑つて、たつた一言だ。たつた一言わたしはあなたにいいたいことがあつて來た、それだけ耳を借してください。——さういつて、その老人はわしの聞く聞かぬにかゝはらず、ひとり言葉をつゞけ、「なんちの眞實は雲にまでおよぶ、汝のたゞしきは神の山のごとく、なんちの審判はおほいなる淵なり」といふ文句をくりかへしてこのなんちとはエホバ様のことぢや。エホバ様はただしくゆるぎない山のやうな心をもつて人間をさばかれる。そのおさばきは靜かに水をたゞへた淵のごとく深く澄んでゐる。人間はつねにこの審判の淵にのぞんでゐるのだ。人間のすべての罪は、たえず神のお審判をうけてゐる。人間同士の間には法律といふ掟があつて、罪をさばくが、人間には人間だけの罰しか與へられ

ない。あなたがさうして苦役に服してゐる、それだけの懲しめしか與へられない。しかし神の審判は永遠の淵と湛へて、人間の姿をうつす淨い鏡となる。底知れぬ神の試練はそのなかに秘められてゐる。あなたはわたしの言葉をみんなおぼえてくれなくてもいい。たゞ審判の淵に人間はつねにのぞんでゐるといふことだけ、よくよく考へてゐてくださればいい。審判の淵——このみぢかい言葉を、わかるまでひとりよく考へて御覽なさい。わたしは、こゝの教誨師ではない。こゝにゐる保科牧師の友人で、今日たま／＼保科さんに會つたら、あなたの話が出たので、是非あなたに會ひたくなつたのだ。それで典獄さんにお願ひしてこゝへやつて来た。わたしよりもあなたは保科さんからすでにいろ／＼のいゝ教へを聞いてゐる筈だ。今さらわたしがこれだけのことをいつても、それがあなたの胸に滲み入るとは思はない。しかし、人間はかうしてみな——あなたも、このわたしも、絶えず間に審判の淵にのぞんでゐるのだ。よく考へてゐてください。人間は人間の掟に對して、どんなに反抗も出来る。しかし神の構へた審判には、なんの反抗もできない。それは神の御心が正しく絶対のものだからだ。人間はどんなに意地張らうとも、神の力、神の意志、神の計畫にはかなはない。自分の勝手だといつても、神の

力、神の意志、神の計畫には一瞬も服従しないではゐられない。あなたが、おれの自由だといつても、空気を吸はずにゐることはできない。空気を吸ふといふことは、すでに大きな自然——神の力、神の意志、神の計畫に服従してゐることなのだ。人間はかうして、神に服従してこそ人間としての自由は得られる。空気を吸ふまいとしても、吸はずにはゐられぬのが人間である。すべてこの通り、神の仕事は深く高く絶対です。神の審判もその通りです。つまらんことを聞いたと思ふでせうが、どうぞこの審判の淵——といふことだけを、この一言をよく考へておいてください。わたしはたつたこれだけをあなたにひたいたためにこゝへ来たのです——とかう、その老教誨師はいつた：：わたしはその教誨師の言葉を、ほとんど耳に入れなかつた。こんなお説教は、今までなん度、いや、なん十度か聞いてゐる。神の力とか神の意志とか神の計畫とか——そんな言葉は、もう耳にたこだ。有難さがない。なにをクド／＼役にもたぬことをぬかしやがると、たゞあざ笑つて、牧師の顔をフ、ンと見あげてやつた。わたしの眼がその老人の眼とびたりと會つた。——その時です。わたしはその老人の眼に、なんともいへぬ慈悲のこもつた光を見た。それはその牧師のいつた、審判の淵といふ言葉を、そのまゝあらはし

た、淨く澄みに澄んだ色であつた。ほんたうにそれは、深い淵のやうに靜かだつた。そしてどんな人間の心でもそのまゝ映して、すつかりそれを讀み取り、善と惡の審判をつけるやうに見えた。——まつたくわたしは驚いた。こんな眼をいままで見たことはない。腹の底の底までジツと見入られたやうに思へた。恐ろしくなつた。低い、しやがれた聲はたゞ耳をかすめるに過ぎなかつたが、このわたしにそゝがれた眼光は、この牧師のすべての言葉を、その意味のなん十倍かに強く湛へてゐた。なにを、こんな奴に睨め据ゑられてどうするもんか！ と、わたしは意地になつて睨めかへさうとしたが、不思議にわたしの身體は嚴重な繩でしぼりつけられたやうに、動かなくなつてしまつた。自然に頭がさがつた。——と、審判の淵といふ文句が、わたしの胸に喰ひ入るやうにこたへて來た。おゝ、やつぱりさうしたことが人間にあるのだ！ この牧師の眼がそれだ！ この牧師は神の審判を説いてゐる。しかし、それを説く人にも審判の力をもつてゐる。まして神といふものにどれだけの恐ろしい審判の力があるか知れない！

——わたしはハツとした。なんとなく自分の周囲を見まはした。自分の前にもうしろにも、大きな審判の淵がバツクリ口をあいてゐるやうな氣がした。自分の今までの罪といふ罪を、ハツ

キリわたしは考へることができた。そして、それをおごそかにさばかれる神の力、神の意志、神の計畫といふものが、まさまさとわかつて來るやうな氣がした。なんとなしにソツと身の毛が立つた。自分が今まで平氣でやつた罪惡が、一つ／＼なんともいへぬ恐ろしい鏡にかけて照し出されるやうに、明瞭な形をとつてわたしの眼の前を過ぎて行つた……

加島の聲は、みちかく鋭く詰まつて來た。彼は肩で息をきつた。博巳は熱のこもつたその調子にひき込まれてしまつて、片唾をのんで黙つてゐるばかりであつた。

「……浦都さん。わたしはその牧師に、ものゝ一時間と向きあつてゐる。ではない。わたしが恐る恐る頭をあげた時には、その牧師はもうなんにもいはないで、例の をやすらかに笑はせながら、わたしの額にちよつと手をやつてなにか祈りの言葉を二言三言口のなかでいつたかと思ふと、よく考へてください、生命を大事に生きてくださいといつたまゝ、軽く會釋をくれ、そのまゝ行つてしまつた。なんといふ名か名乗りもしないで、靜かに踵をかへして行つてしまつた。……話はこれだけです。いや、あなたが聞いては、あまりに筋通りな、平凡なことなんのたしにもならんことであらう。しかし、わたしは今でもあの牧師の眼を忘れることはで

きない。それからのわたしは、もうなんにも教へられないでも、物の善と悪は差別がついた。審判の淵——といふ言葉だけを考へて、たゞまとも獄中で働いた。そして、幸ひに罪の償ひだけを果して出獄したが、それは人間の掟によつて罰せられた償ひで、自分は償うてもく償ひきれぬものがあるやうに始終感じてゐた：：のう、浦部さん。わかりましたか。わたしはかうしてこの仕事をはじめて七年になる。こゝに集つてゐる者は、みんなたしと同じに人間社會の罪を犯してゐる。彼等は罰せられた。しかし彼等はそれでなにもが 裁されてしまつたとは考へてゐない。人間同志から見れば、それでいゝだらう。しかし彼等、神の審判といふことを考へてゐる。これはわたしが教へたのだ。いや、教へたといふよりも取りついだのだ。わたしはほんたうに、宗教といふものも知らないし、信仰といふものもつてゐない。たゞ、あの年寄つた牧師の澄んだ眼をいつまでもハツキリと記憶してゐるだけです。わたしはいつもあの牧師の眼を思ひうかべることができる。わたしは自分をいましめるにも、彼等にさとすにも、審判の淵といふ言葉よりほかは知らない。わたしはそれでいゝと思ふ。この言葉一つ守つて生涯を終へることができれば有難いと思ふ。もうこのほかの言葉は考へたくない。わたしはどん

な時、どんな場合にも、たゞこの言葉だけをみんなに繰かへしてゐる。同じ言葉を彼等は幾度幾十度わたしの口から聞いたかも知れない。しかし彼等は、いつも新しいいましめを受けたやうに、審判の淵といふ言葉の前には、まつたく心から頭をさげる。：：浦部さん。わたしがあんなにいふ言葉もこれ一つしかない。これ一つしかわたしは知らないのだ、わたしには學問がない。わたしはたゞこれだけをあなたにも話す。審判の淵といふことはわたしのたつた一つの戒めだ。眞實だ。わたしは生涯これだけの眞實で生きてゆく。あなたがかうして、こゝでわたしのところにゐてくださる間、わたしはこの一つよりほかにあなたに話すなんにもつてをらぬ。いつまでも、人間は神の審判をうけてゐるといふことばかりをいふことだらう。浦部さん。あなたはこゝへ来て、この一つだけを知つてくれれば——そして、この一つの言葉であんた自身を守つてくれれば、わたしはそれで満足だ。嬉しいのだ。」

——加島の語調は肅然としてゐた。しかも彼の一句々々を切る語尾には、はなは進るやうな熱意がこもつてゐた。博巳はなんともいへぬ強い力でグイ／＼と上から押しつけられるやうな気がした。加島の言葉には、決して理論もない、批判もない。だがそこに惻々として彼に迫るものは

たゞ彼の人間であつた。眞實であつた。ほんたうに、これこそ自然がこの人物を驅つて、自然の大きな道を示めす光であると思へた。

——ガタリ！ と、博巳は椅子から床の上に崩れるやうに膝まづいた。

「あ！ どうした？」

加島はさゝへようと手を伸ばした。——と、それより早く、彼の手は博巳によつて烈しく堅く握られた。無言のまま、見あげた博巳の兩眼には、一杯に涙が宿つてゐた。

「……………」

これも無言のまま、石のやうに見おろす加島の眼——

「僕……間違つてゐました！ 誤つてゐました！」

「おゝ、浦部さん！」

「……おゆるしく下さい！」

「わたしのいつたことがわかりましたか！」

「みんなよく、わかりました。僕は眼がさめました！」

犇と握りかはされた四つの手はいつまでも離れなかつた。——すっかり暗くなつたこの部屋に、感激の沈黙がいつまでも續いてゐた——

——その夜、静かに更けた森の前に、ジツと空を仰ぎながら、切株に身をよせて立つてゐるのは博巳であつた。

めづらしく風はなかつた。深くひろがつた穹窿には、あざやかな星座が、一つ／＼に人間の測ることのできぬ久遠の軌道を示すがやうに輝いてゐた。黒く連なつた森のそとの地平は、寂寥として聲なくうねつてゐた。身柱から滲み入るやうに大氣は冷たくあざれてゐた。

強く腕を組んで、博巳はいづれを果、いづれを極みとも知らぬ、遠い星から星に眼をたどらせてゐた。チカ／＼と刺すやうな、おだやかに瞬くやうなその光——彼の胸には、すべてがなにかを誘ひ、なにかを語るやうに感じられた。

人間が誇つてゐる知識といふものが、この幽玄な天地をどれだけ付度することができるか？ この自然の秘めてゐる力、意志、計畫の、幾千萬分の一を理解することができるか？——神

はそれ等のすべてを悉知する。そして支配し直裁する。それを思ふ時、なんともいへず恐ろしく、嚴かな威容と遍在とに撃たれざるを得ない。

——彼は、五體を締めつけるやうな、或る靈氣を覺えた。

加島社長のいつた言葉——底も知れぬ審判の淵は、彼が踏み出す一步の外に、ひろがりひろごつてゐる。かうして立つてゐる自分の周囲には、隙間なく神の正しい瞳が動いてゐる。人間は眠る。神は眠らない。誰が見てゐなくとも、神は見えてゐる。自分の姿、自分の心の底の底まで、あやまちなく見つめてゐる。彼は大きな愛をもつて人間に對する。彼の愛が不易不變のものであるだけに、愛からはづれた人間の行爲を彼はどこまでも赦さない。醜きもの、罪あるものを責める。かうして、暗く靜かに、天地は人間の眼からは働きを休止してゐるかにも見えるが、神の心はすべての支配を、一瞬たりとも怠つてはをらぬ。彼は絶えず間に、あらゆるものを審判き審判く——

——博巳は動かなかつた。

彼は今、おのが踏める大地と、おのが仰げる虚空との間に——この、かくも廣く高きもの、

間に——まつたく、身じろぎもならぬまで八方から壓しつけるやうな、苦しいけれど呼吸すればするほど、胸のあかるくすいて來る靈氣をうけたのであつた。

——よし、すべてを神の審判にまかして進まう！ 自分のゆくべきまでを、たゞしく強く生きてゆかう！ ——自分にはじめて、人間の道を知つた。いや、知つたのではない。知るのはいからなのだ。今、自分はやうやく眼の前にひらけて來た、眞實の一路の門に立つてゐるのだ。明日から一步一步を元氣よく進んでゆくのだ。自分に與へられた運命に、悦服しながら勇ましく進むのだ。そこには不平も不満もある筈はない。神の眼からは人間は平等だ。無差別だ。神はあやまちなく人間を見守つて、これに寸分狂はぬ裁斷を與へる。彼は地上幾千億の人間をたゞ一つの大きな意圖として動かしてゐる。榮譽、財貨、知識——そんなものは、人間同志にみじめな争ひの材料として用ひられてゐるだけだ。神の全知と全能は、そんなものにかゝるには、餘りに廣大無邊である。人のかたより勝ちな價值判斷がなになる！

「審判の淵！ ——審判の淵！」

彼は、自分にかう叫んだ。

——まったく彼は、自分を恥じた。そして、今さらのやうに、加島といふ人物のもつ、大きな、なごやかな慈愛をしみじみ感じた。

この山の、この靈氣が、たしかにあの人物に乗り移つてゐるのだ。彼のたつた一つの言葉はまたたつた一つの自然が斷ずる訓戒なのだ。彼はなにもほかのことは知らぬといつた。一つよりほかは知らぬ心——その心こそどんなに強く尊いものであらう。一つの心そして一つの道——神の示すところがそれなのだ。彼の心はかうして最後の最大のものよりほかは考へぬ神の心に合致してゐる。彼はおのれの、そして神の一つの道に醒めてゐる。さうした人物に、自分がこれからの身を托すことは、どんなに幸福だらう。——自分の生活はこの山の靈氣に、洗ひ清められなければならぬ。

どこまでも——どこまでも加島の言葉一つを奉じて、自分はこゝで働かう。加島は自分の社長だ、君主だ——父だ！

かう決心した博巳は、嘗て経験したこともない、新らしい、すがすがしい精力に、満身がお

のづから躍り出すの覺えた。

——森の上は、いつの間にかほのかな薔薇色にそめられてゐた。あらゆるものを、今日の希望に粧まほふやうな、愉快な朝がはじまつた。

……お前抱く手にや口説くどもあるが、

斧をとる手にや愚痴はない……

——寄宿舎のはうでは、そろそろ仲間が起き出したか、屈托のない唄が、面白げに聞えて來た。

「おう、お前、こゝにゐたのか。馬鹿に早えぢやねえか。」

二人連で、斧をかつぎながら肩を並べた人夫が、彼の前を通りすぎようとした。

「お早う！」博巳は潑刺とした聲で笑つた。

思ひがけない挨拶に、人夫は少々面かくらつたやうだつたが、

「どうも感心だ。こんなに早く働きに出るため、お前……」

「いゝや、昨夜いよちよつと眠られなかつたから、宿舎から抜け出して散歩してゐたんだ。すぐ歸

つて斧をもつて来なくちや。」

「なに、眠られなかつたのかえ。それぢや疲れてゐるだらう。毒だよ。なんの、お前が休んだつて、仕事がどうかうといふんぢやあねえ。お前、ちよつと寝て来るがいいやな。」

「有難う。なあと大丈夫だよ。」

「大丈夫だつて……お前、まだ馴れねえ身體だから無理をしねえがいゝぜ。部屋頭について、休んで来るがいい。働く身體で、一時間でも寝ねえのは悪い。」

「有難う。」——博巳は思はず涙ぐんだが、すぐ碎けた笑ひで、「なあと、僕だつて、運動で鍛へた手足をもつてゐる。今にこゝへ来て馬力を見せるよ。宿舎で一杯かつ込んだら、眠らぬ疲れ位はすぐ取り戻す。」

元氣よく彼は駈け出した。人夫は、妙な、解せぬ顔を見あはせた。

二つの鞭

寄宿舎へ走つて歸ると、入口では、もう洗面を終へた人夫等が、それ／＼今日の仲間をつく

つて出かけようとするところであつた。愛嬌者の海豹が、他愛もない戯談口を敲きながら、ついで傍の飯場で、辨當をつめて貰つてゐた。

「おい、最良目に、うんと押へつけてくんねえよ。腹が減つちや、戦もできねえ譯だからな。」
彼は背のびするやうに、濼々と舞ひあがる釜の湯氣の彼方で働いてゐる賄方の一人に聲をかけた。

「この上どう入るもだ。箱の底が抜けつちまはあ。」賄方は笑つた。

「うんにや、抜けねえ。おれの箱にやあ昨夜すつかり釘を打ちなほして置いたあ。」

「こいつ、すかさねえ野郎だ。さあ、ひと握り餘計に押しなよ。」

「おい、梅干をもうすこし負けて置きねえ。」

「煩せえな。手前だけだぞ、毎朝辨當で文句をいふなあ。」

「その代り、辨當だけの眼さましい働きをしてるんだ。へん、こゝの模範人夫だ。粗末な扱えをしなさんな。」

「大食れえだけが模範だらう。」賄方はやりかへした。

「なに、海豹なら、まだ長糞、高軒つてえ模範があらあ。はゝゝゝ。」他の一人の賭方もやつゝけた。
た。

「やいゝ、人間の悪いことをいふない。これだつて嫁取前の身體だあ。」

「ふん、海豹の嫌あなら、臘腸おつとせい見てえな女郎めらうだらう。」

「馬鹿にするな。こゝでうんと働れえて、貯金の出来る日を、指折り數へて待つてゐる、心掛
けの嬉しいのがあるつてことを、手前達あまだ知るめえ。」

「やい、まだ寝惚けた眼がさめねえのなら、味噌汁みそ汁の残りがあるから、その面へブツかけてや
らうか。」

賭方は、大鍋の中の杓をつかんで、振りあげる眞似をした。

「おつと、危ねえ！」

海豹は、わざとらしく飛び退かうとした時、入つて来る博巳にドンとぶつつかつた。

「や、失敬！」博巳は笑つた。

海豹は振りかへつたが、急に不快げに、口をつぐんで、賭方に眠くばせをした。賭方も、黙

つてチロリと博巳を見た。

「済みません。僕、まだ、朝飯を食つてゐないのです。すぐ働きに出かけたいから、食堂では
面倒だ。こゝで、その味噌汁のなかへひと握り飯をぶち込んでください。そいつをかつ込んで
ゆくから。」彼は氣輕に、叮嚀に頭をさげた。

「お前、どうして飯を食はなかつたのだ？」

半ば怪しむやうに、半ばからかふやうに、賭方は湯氣の中から顔をつき出した。

「えゝ、昨夜、どうも寝つかれなかつたもんだから、今まで森の中をうろついてゐたんです。
はゝゝゝ。」

「なに、森の中をうろついてゐた？ どうして眠れなかつたのだ？」

「え。」と、博巳は率直に頭を掻いて、「社長から叱られて今までの行爲やうかたの悪るかつたことに氣
がつくと、心が咎めて、興奮して眠られなかつたのです。」

海豹は、怪訝けげんな眼をチラと向けた。それが博巳の眼と會つた。なんのこたはりもなく、博巳
は正直に、彼に會釋をした。

「どうも、昨日は失敬しました。ゆるしてください。なにもかも僕がいけなかつたのです。」

海豹は、例のまるい眼を、パチクリさせた。博巳は構はず彼の前に立つて、

「ほんたうに僕はいけなかつた。森へ行つても、みんなにお詫びするつもりです。今日から改めて、この森の人間——みんなと兄弟の仲間に入れて貰はうと思つてゐます。君もどうか昨日のことは水に流して、これから僕を兄弟の厄介者とも、仲間の端つくれとも思つて、わからぬところは教へ、できぬところは叱り飛ばして、一緒に仲よく働かせてください。僕は昨日社長さんの説諭をうけて、はじめてこの森の有難さ——人間が人間らしく生きることの有難さ——を知つたのでした。今日から、うまれ變つた僕を見てゐてください。お願いします。」

「さうか。」海豹は、はじめて或る警戒を解いて、「お前みんなわかつたのか。おれ達の心がわかつたのか。」

「社長さんは、泣いて僕をいましめられた。僕も泣いた。」

「む、さうか。それはよかつた。よく、わかつてくれた。お前がさうわかつてくれれば、おれあもうなんにも話あねえ。おれあ嬉しい。」

「どうぞ、これからよろしく！」

「なんの、さういふ氣になつたお前を、おれ達がどうして仇敵にするもんか。よし、兄弟だ。海豹は博巳の手をとつた。

「有難う。ゆるしてください。」

「なんの、ゆるすもゆるさねえもあるもんか。そんな水臭せえ言葉あ、この森ぢやあ無用だ。のう兄弟！」海豹は賄方を見かへつた。

「お、さうだとも。かうして笑つてしまやあ、あとにどんな心持も残らねえのが、おれ達兄弟の自慢なんだ。」賄方の顔にも、深い感動があらはれてゐた。

「おい、とにかく浦部さんに、飯を食はせてやつてくんねえ。」海豹はいつた。

「浦部さんはやめてください。浦部つて、同じ仲間に、呼び棄てにしてください。」

「よし、呼び棄てにしよう。そのかはりお前も、ください——はよしねえよ。」

「え、よします。」

「おい、その、ます——がいけねえ。は、は、は。よし、やめるといつて貰えてえ。」

「え。」博巳も笑つた。

「さあ、浦部！ それぢやあ一杯早いところを搔つ込みねえ。」

註文どほり、賭方は、茶碗に飯を盛つて、味噌汁を無難作にかけてくれた。

「有難う。」博巳は元氣よく受取つた。

「そら、箸だ。」海豹は、その棚に洗ひあげてある竹箸を二本引抜いてくれた。

「や、有難う。」

「おい、ゆつくり食ふがいゝぜ。おれは待つてゐてやらあ。一緒に森へ出かけよう。もうお前その口からなんにも言ひ譯がましいことをいふにやああたねえよ。森で、お前がこの前喧嘩あした、堀田や中山や、みんなの者におれから話してやらあ。」

「よろしくお願ひします。」

「また、ます——か、いけねえな。」

「ぢや、どうかよろしく——お願ひだ。」

博巳は、茶碗を抱へながら笑つた。海豹も賭方も笑つた。——二杯ばかり、急いで吸り終る

と、博巳は櫃かまに並べてある斧の一つを取つて、兵卒のやうに勇ましく擔かまへ銃この姿勢をとつた。

「さあ、出かけよう！」晴やかに、海豹は笑つた。

——肉體にみなぎる血潮も、精神に籠る力も、今日からはまったく新らしい博巳であつた。

更生した博巳であつた。

斧を振ふ腕は、思ふさまに伸びてゐた。發止はつし！ と、撃ちおろす時、重い双がキラリと日に光つて、削げた匂やかな木片が飛ぶ。頗る愉快である。仰ぐも眼にあまるひと抱への樹が、斧の空氣を切つてサツときほひづくところ、胸に跳ね、肩を越して、なま／＼しい肌を見せた木片が、飛びに飛ぶ。十度、二十度、三十度——斧は彼の、ま／＼あげたシャツの下の方を、ドリリと動かしながら、撃ちおろされ撃ちおろされる。次第に、樹の周囲は、圓錐狀に刻まれる。と、やがて、メリリといふ音がして、幹と枝の重味に傾きはじめるやつを、最後の一撃、ウンと横なぐりに斧を加へながらに飛び退けば、見る／＼はげしい傾斜をなして、凄しくメリリと棒つ倒しになる。壯快だ！

一本やつゝけて、その幹にまたがりながら、息を入れる時、われながら或る征服感、勝利感、優越感といふものを感じる。額の汗をシャツの袖で拭つて、グツと胸を張るやうに、日光に梳かれたオゾンの多い大気を、スーツと腹の底まで吸ふ心地は、なんともいへない。労働はこれだから面白い。尊い。有難い。

ふと隣の樹に眼にうつる。

「こんどは、こいつだ！」

すぐ立ちあがつて、足を踏んばつて身構へる。見ろ！ 覺悟しろ！ と、いひたいやうな氣持になる。更に元氣づいて、勢ひよく第一撃を、ウンと振りおろす。——そこには、理智も、煩腦も、意慾も、すべてのわづらはしい心は働かない。たゞ力だ。渾身に湧く力だ。正念正定の、懸け値のない力だ。なにを考へ、なにを想ふ餘地もない。斧の上下と、刃のあてどころと樹の重心と、それだけを、自然に感得してあればいいのである。

「うん！」——と、おろす。

「やつ！」——と翳す。

「えー！」——と、撃つ。

「どつこしよ！」——と、構へる。

博巳は、ひとりで躍るやうに働いた。不思議に今日は疲れない。へたばらない。無性に痛快である。——

ヒョッコリ、樹蔭から海豹が顔を出した。

「浦部、急にそんなに働き出して無理をしちやいけねえぜ。まだお前の身體は仕事に馴れてゐねえから。」

「なあに、大丈夫だよ。」

博巳は、斧を發止とおろした。

海豹は感心したやうに彼を見たが、自分も二三間はなれたところで、仕事にかゝつた。

……切つて倒した枯木の枝に

花が咲くかや仇花が……

海豹はうたつた。

呑氣げに、劈つくり撃ちおろす斧——さすがに馴れて、海豹の斧の刃は、たくみに樹の重點のかゝつた幹に、無駄なく切り込んで行つた。博巳が一本切り倒す間に、彼は二三本を切り倒した。しかも彼の斧の調子は、博巳のやうにせかせかせかしてゐない。

「なるほど……」博巳は、ちよつと息をつきながら、首をひねつた。

「なんだ。なにがなるほどだ？」海豹は唄をやめて振り向いた。彼は息ぎれひとつとしてゐる。

「いや、君の仕事のはかがゆくのに敬服してゐるんだ。——僕は君の倍ほど斧を動かしてゐながら、仕事の結果は君が倍ほどさも勝つてゐる。それでなるほど——さ。」博巳は笑つた。

「どんな仕事にもこつこつともがあるんだよ。いゝかね。おれが教へるから、見てゐねえ。斧を使ふのに、お前はよつぽと無理をしてらあ。力まかせにやつたつて、斧の利き工合は充分あらはせるもんぢやあねえ。そこがこつこつともものよ。な。かうして、斧は腕で動かすものぢやあねえ。腰だ。それから肩だ。腰が据つてねえと、刃の食ひ込み方が半分は無駄になつて疲れもひどい。——な、かうして——」

と、海豹は得意げに、斧を振りあげて、うんと幹を一撃した。——が、どうしたはづみか手がすべつて、刃がスツと地びたを摺ると、彼の左の足首に流れた。

「あつ！」海豹は尻餅をついた。

博巳は驚いて駆け寄つた。

「や、怪我をしたな！」

「なに、なんでもねえ。」海豹は、足首を押へたが、「なあに、大したことぢやあねえ。ちよつと下手に自慢をした報いなんだあな。はゝゝゝゝ。」

博巳は、すぐ自分の腰にさげた手拭をとつて、ひき裂くなり、彼の足に繻帯をしてやつた。

「有難う。もうなんともねえ。樹の強い木理に斧が逆らつたもんだから、刃が上つ滑りをしたまでよ。よくやることだ。お前も氣をつけるがいゝぜ。」

「うむ、そりやあわかつたが、君、痛みはしないかね？」

「なんの、これつ位れえ。」海豹は事もなげに笑つてのけて再び斧を振あげた。「——な、浦部よく見ねえ。かうして斧をおろす時にやあ、腰をきめるのが第一だ。腰をきめたら、息をつめ

て、かう、肩を一杯に使つてうんと……」

海豹は撃ち込んだ。樹は、メリ／＼と半ば傾いた。

「危いよ。」

「さあ、もうひとつだ。こん畜生！」

——で、樹は、彼がひよいと身體をひるがへす隙を、凄じく大きな弧を描いて、地面に倒れる。

「なんだか、怪我がひどいやうだが、膏藥かなんか、事務所で貰つて来ようかね。」

「なあに、それにやあ及ばねえ。傷なんか、なまじつか藥をつけたりすると、かへつて膿をもつ。来たり、悪とがめをしたりする。たゞ、かうして、手拭の切れつ端でく／＼とときや充分だよ。」

——でも、足首の繃帯には、血が滲み出してゐた。

「ほんたうに、それでいゝのかね。」博巳は心配だつた。

「おれ達の手足あ、お粗末に扱つてやらなきや、癖になつていけねえ。は／＼。」

さう、笑ひながら海豹が、隣の樹へ歩み寄つた時、

「いや、精が出るな。」

と、樹の間を潜りながら現れたのは、加島だつた。——早くも海豹の足首に眼をとめると、

「野寺、怪我をしたのかね？」

「あ、社長さんですか。」と、海豹は頭をさげて、「なあに、なんでもねえんで……浦部に、ちよつと海豹流の斧の傳授をしようとする手もとが狂つたんで。は／＼。」

「しかし、それはいけない。事務所で、ちよつと手當をし、貰つておいで。」

「大丈夫ですよ。社長さん。」

「いゝや、大丈夫でない。事務所へ行つて来るがいゝよ。」

「大丈夫ですから。」

彼が、また振りあげよ、とする斧を、加島は遮りながら、

「いけない。どんな怪我でも、そんなに、手拭でく／＼つけて置いたのぢやいけない。事務所へ行きたまへ。」

いたはるやうに、しかも、殿と命令するやうに加島はいつた。

「くす。」

海豹は、おとなしく斧を持ちなほした。

「早くゆくがいよ。」

「くす。」

「それ、そんなに、びつこを引いてるぢやあないか。事務所まで歩けるかね。わしの肩を借さうかね？」

「なんの、社長さん、これしきのことに。」

ビヨン／＼跳ねるやうに、痛さをかくして海豹は駈け出した。

「おい／＼、そんなに駈け出さなくつても……つまづくよ。」笑ひながら加島は見送つた。

海豹が、森の一隅を横切つて、事務所のはうへ見えなくなつた時、加島はおだやかに博巳へ振りかへつた。博巳は頭をさげた。

「どうだね？」

「え、今日からすつかり、この森の兄弟にさせて貰ふつもりで働いてゐます。みなさんに今までの態度を詫びて、和解して貰ふつもりでゐます。」

加島は満足げにうなづいたが、上着のポケットを探つて、一通の西洋封筒をひき出した。

「浦部さん、あなたに手紙が来てゐた。」

「はあ……？」

博巳は、受取つた。——ペンで細く肩さがりに書いた文字——彼はそれが麻知子あきこからの手紙であることをすぐ知つた。きまりわるげに彼は二つに折つて、ひき裂かうとした。

「どうして讀まない？　せつかく書いて出したものではないか。讀むがいよ。——麻知子さんて、それは誰なのかね？」

「え……」博巳は恐縮したやうにまた苦笑した。「この女は、むかし僕が亂暴で放埒だつた生活の中にだけ生きてゐた女なんです。今のかうなつた僕には——僕のかうした眞實な生活には、もう入つて來られない女なんです。僕はあの頃いつぱしの不良仲間の首領氣取で、この女

を張りあつたりしたことがあるんです。はゝゝ。」

「さうか。」加島は静かにうなづいたが、「それでも、せつかく出した手紙だから、読んでやるがいゝ。こんなところへまで、手紙をよこすのだから、その女はあなたに好意をもつてゐるのだ。その好意に對して、読んでおやり。」

「社長、皮肉を仰有らないで……」

「いや、皮肉ではない。からかつてゐるのではない。その好意を受けてやるのだ。あなたの以前の生活は、それはよくなかつたらう。そのなかにだけ生きてゐたといふ女——どんな人か知らんが、それでも、人間には真心といふものがある。こんな荒くれた山の森でも、若い美しい女の言葉を聞くことは、悪い心持はしないものだ。はゝゝゝ。どうだね、わしの前で読んで聞かせてくださらんか。」

「……」

「どうだね？ わしも昨日いつたとほり、若い時分には戀といふものを知つてゐたのだ。今頃の若い人の戀はどんなだか、聞いて見たいよ。はゝゝゝゝ。」

「いえ、これはまつたく、お話することもできない位の、詰らない、ぐうたらなものです。」博巳はうち消さうとした。

加島は微笑を續けた。

「まあ、そんなに眞面目にならんでもいゝ。若い時分には、誰もいろいろの……あとから振り返つてどうしてあんなだつたらうと思ふやうな分別や自制に缺けた眞似をしてゐる事が随分ある。しかしそんなことも、後になつての尊い體驗で、人間は躓つまずつきもあり立ち直るところもある。つて、はじめて個人と個人、個人と社會といふものの關係——義理や情愛や恩怨や権力や服従や、そんなものが一切わかるのだ。こんなことは、わたしのやうな無學なものがいはないでもあなたにはちやんとわかつてゐるだらう。——躓つまずづくもいゝ。轉まぶもいゝ。しかし、そこで憤然と立ち直る力が必要なのだ。あなたは立ち直つてゐる。これからまだまだ、あなたの進む道には、いろんな険しい石もそびえ、痛い棘はりばらもはびこつてゐる。それは苦しい嫌なことだ。そしてまた、面白い愉快なことだ。……はゝゝゝ。いや、なんだか、話が飛んだお説教にそれだ。浦部君、その手紙を讀みたまへ。聞かう。わたしは、この三十年ほど、戀の話を聞いたことがな

い。あなたが、どんなにつまらない、ぐうたらなもんだといつても、わたしの耳にはきつと有難いものにちがひない。せつかくその女が書いた手紙だ。読んでおやりなさい。」

「社長、お言葉を返すやうですが、僕はほんたうにこんな手紙はもう読みたくないのです。また、その女のこと考へたくないのです。僕は今日、はじめて新らしい自分の道へ進んでゆくのです。この女は僕が東京で放縦な生活を續けてゐた時代の、かうして振りかへつて見て、いはゞ悪い記憶だけを殘してゐる女なのです。」

「だが、その女は、まだあなたを思つてゐるのだらう。」

「僕が忘れてしまへば、その女も僕を忘れてしまふ——そんな女です。大丈夫です。」

「なんだか、さういはれたゞけでは物足らないな。わたしは、もつとなんとか話のある女だと思ふが。」

「社長さんが、むかし戀をなすつた頃の、そんな眞實をもつた女は、今の都會には見られませぬ。」

「こりや逆襲かな。はゝゝゝ。眞實をもつた女……わたしは、東京を去つてから、暗い監獄

や、かうした山の中で暮してまつたく世間といふものから隔つた生活を續けて來たのだから、一切がわからん。しかし時勢といふものは、人間の心を強くもし弱くもする。そんな輕薄な人の心は毎日見る新聞以外には想像もつかんが……」

「だから、この森に働いてゐる人達は、なんといつても幸福です。その幸福を、昨日までの僕は知らなかつたのです。だが、僕は今日、なにもかもわかりました。ほんたうに愉快です。」

さういひながら、博巳は、手にもつた手紙を、封筒ごみに、ビリビリと引き裂いた。

「たうとう読んでやらないのか。可哀さうに。」加島は笑つた。——博巳は斧を取りあげやうと心なし落ちかゝる風に、地びたの紙片は、吹き散らされた。——博巳は斧を取りあげやうとした。

「浦部君、まあ、もうすこし話したまへ。あれからどうしたかと、わたしは心配した。昨夜、あなたは宿舎を抜け出して、森の中をひとり歩いてたね。」

「え、御存じですか。」博巳は驚いた。

「はゝゝゝ、わたしはあなたのあとをつけたのだよ。實はあゝして、君が事務所を出て行つて

から、どうも氣にかゝつてならないから、宿舍の君の部屋のはうを、窓からそれとなく注意してゐたのだ。すると、あの夜更に、あなたの姿がソツと戸口から忍んで出た。わたしはすぐ君の二十間ばかりうしろをあるいたのだ。」

「……さうですか。」

「わたしはあの時、あなたが心からわたしの言葉を聞いてくれたとは思つた。しかし、わたしの言葉にも、かなり手強すぎたところがあつた。あゝしてわたしと手を握りあつて歸つて行つたが、それからどんなことを考へるか。——なんといつてもあなたは若い。わたしはあなたの心を充分信じてはゐるが、それでもやつぱり心配は心配だ。そこで窓から監視してゐたのだ。すると、戸口にあなたの黒い姿が現れた。森のはうへ歩いてゆく。わたしは、なにがなしあとをつけて行つたのだ。」

「……さうですか。」

博巳は、かうまで自分の身を懸念してくれる、慈父のやうな加島の心持を、更に深く知り得て、泣きたい氣持にまでなつた。斧を地についたまゝ、彼は頸垂れた。

「しかし、かうして今日のあなたの姿を見るとわたしはすっかり安心した。こゝまでの心をもつたあなたなら、今、東京へ歸したつていゝと思ふ。あなた御親父から頼まれたことは昨日と今日で充分に徹したやうに思ふ。ど、だ、浦部君、わたしが書面を添へるが、歸る氣はなかな。」加島は博巳の肩に手をかけた。

「社長！ 僕の修業はこれからです。僕ははじめてかうして心と心とで交際のできる、こんな愉快な、こんな嬉しい仲間に入つたばかりです。この生活を僕は棄てたくありません。僕はまだこゝで御厄介になりたいのです。東京に歸つて、僕に、こんな淨い心、續けさせてくれる仲間が一人でもありませうか？ 僕は今日この森の兄弟仲間にして貰つたのです。どうぞ戯談にもそんなことを仰有らないで——僕は、まだまだ社長や、兄弟達に、教へて貰はばならない澤山のものをもつてゐる。この森の自然もこれからどんなに僕に人間の眞實を教へ込まうと待ちかまへてゐるか知れません。ほんたうに、二度とそんなことを仰有らないで。」

博巳は意氣に燃えてゐるやうだつた。加島はジツと眼を閉つた。

「嬉しい。あなたの心持はわかつた。よろしい。わたしは二度とこんなことはいはない。あん

たがいと思ふまで、こゝにおいで。」

「有難うございます。僕、こゝでうんと修業したいのです。人間のほんたうの汗をかいて見た
Sのです。」

「よろしい。働くがいよ。その斧であんたのその熱とその力を、しつかり試して見るがいよ。」
加島はあかるく笑つた。彼が再び博巳を見た眼は、強い慈愛に輝いてゐた。

——加島が去つた後、博巳はすぐ働きはじめた。彼は自分に、更に新しい勇氣が湧いて来る
のを感じた。渾身の精力を振つて、彼は發止々々と撃ち込んだ。木片がパツと飛ぶ。飛んでは
地びたに跳ねる。——愉快だ！

博巳の額からは、珠のやうな汗がタラ／＼流れた。シャツの袖で拭ふ間も惜しいとばかり、
力まかせに斧で風を切る。

「や、おそくなつた。」海約が戻つて來た。

「足はどうだつた？」博巳はニッコリと見迎へた。

「ちよつと薬で洗つてもらつて、グル／＼と巻きつけて來た。もう大丈夫だ。」

海約は、いきなり斧を取つて、ウンと撃ちおろした。

兩人は背を向けて、働き出した。物もいはない。もう、博巳は、シャツに透るくらゐ、グツ
シヨリ汗をかいてゐた。彼の眼は、いつしか燃えるやうに光つてゐた。

——事務所のはうから、今日の仕事に終りを知らせる鐘が鳴つた。

森の中から、斧をかついだ人夫等が、三々伍々、彼等の愉快な労働の唄をうたひつゝ、互に
仲間を呼びかはし、誘ひ連れて引きあげてゆく。彼等の前には、楽しい晩飯が待ちまうけてゐ
る。それから宿舎に集まつて、めい／＼圓座をつくりながら、笑つたり囃したり、二時間ばか
りの夜業がはじまる。この時間がまた彼等には吞氣な、一種の懇親會でもあるのだ。

「さあ、おれ達も歸らうぢやないか。」

海約は今、一本切り倒したところで、博巳に聲をかけた。博巳は、次の樹へ斧を入れたばか
りだつた。

「僕はこいつをやつゝけてからゆくよ。君は一足さきへ歸りたまへ。」

「なあに、いよよ。おれが助けてやらう。」海約は樹のむかうへ廻つた。

「いや、僕ひとりやつて見たい。まだ力が残つてゐる。一日の仕事で、自分の力を使ひきらなくつちや、なんだか氣持が悪い。ひと斧でも手傳つて貰つちや面白くない。一足さきへ行つてくれ。」

「いゝぢやないか。おれにだつてまだ〜四本や五本——いんや、十本や二十本は切り倒せるんだ。力は使ひきつちやゐねえよ。」

「いけない〜。僕は僕の仕事をやりたいのだ。こいつをやつたらすぐ歸る。いゝから行つてくれ。」

「いやに頑固だな。はゝゝゝ。だが、お前はそこに面白れえ氣象をもつてゐる。ぢやあ、お前の氣の済むやうに、おれあ一足さきへゆくぜ。」

「あゝ、あと十分とたてば、追つ駈けて歸るよ。」

「あゝ、ぢや…あばよ！」

「失敬！」

さう博巳が軽く頭をさげると、海豹はクルリと踵をかへしさまに兵卒のやうな舉手敬禮をし

て、滑稽な步調で、跛をひき〜歸つて行く。

博巳は すぐ斧を振り續けた。

「やあ、まだやつてるな。」

「早く歸るがいゝぜ。」

通りすがりの、まだ名も知らぬ人夫達が、懐つこさうに聲をかけてゆく。博巳はそれに、微笑の黙禮を一々投げた。彼が、最後の一本を切り倒して快く汗を拭きながら、斧を杖に息を入れた時、あたりはもうとつぷり暮れてゐた。

蒼茫とした森の大氣は、やゝにするどい冷さをもつてゐた。ふかぶかと暗く傾く空の一角に鮮かな明星が澄んでゐた。それは見てゐると、高くも高まさりゆく久遠の道と、數ふるにすべもない劫久の時が賭けられてゐるやうだつた。無邊無際涯のこの自然の威容に、博巳は人間の受くべき支配と赦されざる所業とを、昨夜よりも更に強く感じた。この空に、この山にこの森に、偉大な靈が、嚴乎として偏在してゐる。人間はこの靈の前に、餘りにも小さい。そして清淨な眞心ひとつよりほかに、この靈にぬかづくべき手段はない。

悔い、恥ぢ——祈り續けて、やうやくに大地に立ち得るのが人間である。——底知れず、慈悲光を放つ審判の淵に臨み得るのである。

敬虔な、眞實な感情に包まれて、博巳はたゞ石のやうに、そこを動かさなかつた。

……切つて倒した

枯木の枝に

花が咲くかや仇花が……

寄宿舎のはうでは人夫等が合唱してゐる。

激潮とした活力にみちて、博巳は斧をかたげると、元氣よくその聲に足をあはせて大股に歩いて行つた。

忘れぬ顔

——試練と忍従の二年が過ぎた。

博巳はその毎日を、森の兄弟達のために、そして自分のために働いた。働きぬいた。はじめ

の半年が経つと、加島は彼を事務員に轉用しようとした。が、彼は断つた。斧を振つて満身の汗を絞ることが、彼にはもう愉快でたまらないのであつた。いつしか彼の顔は日鞠んで、髪は剛く額に亂れてゐた。頭のあたりには埃まみれの髻も生えた。彼は人夫として一人前以上の仕事ができる。その一變した快活な謙虚な心持が、みんなから好感をもたれ尊敬をうけた。彼は「審判の淵」といふ一つの言葉だけを守つて、一生を一つの道に生きようとする加島の心を心とした。そこには彼の健全な思想を蝕む微塵ほどの邪智も邪念も窺ひよる筈はなかつた。正しく淨く生き通す——といふことが、彼のすべてであつた。

しかし、一年後、加島は強ひて彼を事務員に加へた。次第に隆盛に赴きつゝある加島の事業が、どうしてもしつかりした事務員を必要としたからであつた。事務所のデスクに書類や帳簿を取扱ふ身になつても、暇さへあれば、彼は、腹ごなしだといつて上着を椅子にぬぎすてると斧をかついで森へ走つて行つた。

事務員は彼を加へて四人だつたが、加島はむしろ彼に自分の實権さへ委ねようとしてゐた。金銭の出納、注文先との交渉、事務整理の一切を、加島は若い博巳に一任した。博巳はもとよ

り加島の意見や處斷を一々訊き正したが、

「あゝ、それがなによりだ。」

と、加島はたゞ「官判を擦るに過ぎなかつた。加島は、今は森の監督といつたはうがいゝ役目をしてゐた。」

——麻知子からは、相變らず手紙が來た。博巳はそれを開封もせず破りすてた。もちろん返事を出さうとはしなかつた。自分を不人情とも、義理知らずとも、恨み罵つてはゐよう。だが浮華な輕佻なまた自棄的な反逆的な生活から去つて、今は、一日の神の審判に一日の生命を託して、強く眞實に自分の道を辿つてゆかうとする自分である。かうして立ち直つた自分の心持が、あの爛れた生活に馴れきつた麻知子にわからう筈はない。火花のやうに散つて、瞬間に消える戀——それが彼女と自分の、あの頃の無分別さである。このまゝ音信不通にさへして置けば、彼女の心は自分から遠のくにきまつてゐる。なんといつても、かうした今の自分と、あの女との間には、境遇、生活、性格上に大きな相違ができてしまつたのだ。こつちが棄てるといふよりも、彼女のはうから去る日がすぐに來る。——彼はさう考へた。

果して——手紙は、月に三四度のが、一二度となり、一二度となり、半年も經たぬうちに、パツタリ絶えてしまつた。博巳は救はれたやうな氣がした。

さうして彼は、この樺太で二度目の冬を迎へることになつたのであるが、或る日の午後——他の事務員は荷の積み出しで外出して、彼ひとりが熱心にデスクに凭つて事務を執つてゐるところへ、加島が、いつに變らぬ質素な詰襟服で、コツ／＼入つて來た。ペンを持つたまゝ、立つて博巳は目禮した。

「……いや、御多忙中をお邪魔するな。」と、加島は軽く笑ひながら、「浦部君。今日は君をよるこぼしたい話があるのだま。」

「……？」

加島はすつかり嬉しげに、彼のデスクの前に椅子を寄せながら、

「君、これを見たまへ。」

と、内ポケットから一通の、書簡をひき出した。「浦部博道」といふ、父の名がそこに讀まれた。

「父から、なんとかいつて来たのですか。」彼は書簡に手を觸れようとしなかつた。

「まあ、開いて見たまへ。君を早くよるこばさうと思つて、讀むなりすぐ持つて来たのだ。」

「僕をよるこばせること……」

「お父様が、君のこの二年の眞剣な生活振りを知つて、それほど立派な者になつたのなら、もう東京へ歸つてもいいといつてよこされたのだ。わたしはあなたの行状を、なん度かお父様に通じてゐた。が、その返事は、いつも、まだ早い、まだ不安だ。厄介ではあらうが、もう少し面倒を見て貰ひたいと書いてあつた。しかし、最近、わたしが、もう大丈夫だ。博巳君の一變した性質については、わたしが太鼓の判を擦して保證する。まあ是非一度、久しぶりに會つて御覽なさるがいい。その上で、まだお氣にそぐはぬところでもあれば、御遠慮はいらん。再びわたしの手もとにおあづけください。と、書いてあげたら、非常な御満足で、わたしに望外な感謝の言葉を頂いた。そして、人間となつた博巳に會ひたいから、すぐ歸してくれといふことになつた。……浦部君、君はこの二年をこゝにゐずとも、あの、わたしと話して手を握り合つた翌日、そのまゝ歸してもいい人だつた。それを、君の希望によつて、またお父様の希望に

よつて、今日までこゝに置いたのだ。わたしは大自慢で、あなたをお父様の手に返すことができる。また、お父様も、今のあなたを見ては、きつと心からよるこばれるにちがひない。二年の間——ほんたうによく、あなたはこゝで辛抱してくれた。わたしのやうな者の忠告をよく容れて、立派、あなたの身も心も鍛へてくれた。わたしはお父様以上に満足もし、よるこんでもある……だから……」

いひ続けやうとする加島を、博巳は、耐^{たま}りかねたやうに遮つた。

「社長。お言葉をかへしては相済みませんが、僕はまだあなたのもとで働きたいのです。この森にゐたいのです。こんな淨い自然と、こんな有難い兄弟とに別れたくないのです。できることなら、一生でもこゝに置いて頂きたいのです。あの喧騒と虚飾とに満ちた都會に歸りたくありません。また、煩はしい見得や交渉のある家庭に歸りたくないのです。社長。僕はあなたを僕の更生の親と思つてゐます。今となつては、あなたこそ僕の第一の父です。どうか、お慕ひする子供が駄々をこねるのだともお考へくだすつて、僕をしばらくこゝへ留て頂きたうございます。我儘なお願ひですが、僕がこゝを飽きるまで、このまゝ働かせて頂きたいのです。今東

京へ歸つて、僕になんの仕事がありません。家庭に入つて、僕になんの意義がありませんか？」
「そんなことをいつてはいけません。あなたは浦部家の後継者だ。お父様の名譽と地位とを繼いで、更に立派に、社會の大きな事業に携はらねばならぬ人だ。それこそ、意義のある生活を営まねばならぬ人だ。——わたしを、更生の親だとか、第一の父だとかいつてくれるあなたのは嬉しい。わしはそんなに恩を感じて貰ふほどのことはしてゐない。あなたがこんな人に立直つてくれたのは、わたしの忠告を容れてくれるだけの善良な心が、あなたに残つてゐればこそだ。」

加島が論せば論すほど、博巳は意氣込んだ。

「社長。どうかお願ひです。この上なんにも仰有らないで、今しばらくこの山に置いてください。浦部の家を繼いで、立派な、社會の大きな事業へ携はらねばならぬと仰有いますが、僕は僕の今働いてゐる仕事こそ、意義のある大きな事業だと思つてゐるのです。かうしてペンを持ち、また斧を持つて働く僕の心は、僭越を申すやうですが、社會のどの事業よりも立派な大きな仕事にかゝはつてゐる積りなのです。東京へ歸るには、おのづから歸るべき日が参ります。」

それまではこゝで愉快に働かせてください。」

「……さうか。」

加島はジツと博巳を見た。その眼はうるんでゐた。博巳は、もうペンを取りあげて帳簿の記入にかゝらうとした。

「浦部君、まあ、わたしがもうすこしいふことがあるからお聞き。」

「社長、とにかくこの用事を片づけますから。」

「ま、ま、ちよつと、わたしがあなたに訊きたいことがあるから。」

「社長、僕は忙がしいのです。お話はあとで伺ひます。」

「はゝゝゝ。これは叱られたかな。——だが、浦部君、仕事のお邪魔だが、あなたに、改めて訊きたいことがあるのだ。まあ、歸る話は第二段として……」

「第二段ぢや嫌です。歸らないでいゝことにして——なら、簡単に御質問に應じませう。」

博巳をかぶりを振つたが、自分でも餘り子供らしく頑固な口調に、いゝおかしくなつたのか、思はずクスリと笑ひ出した。——その笑ひが、加島には、たしかに嬉しい涙となつて光つたの

であつた。

「浦部君、わたしとしても、こんなにまで思つてくれる君に、どうして歸れと繰り返しかへせるもんぢやない。はゝゝゝ。」

「え、社長。そんならこのまま、この山にゐていゝ譯ですわね？」

「明日、君の心持を、お父様にわたしから通じる。」

「有難うございます！」博巳は、ボンと、帳簿の上にまたペンを擱いて、「では、社長の念願きなさうとすることを承はりませう。」

加島は、椅子をさらにデスクに寄せて、博巳をのぞき込むやうに右腕を前につき出したが、いはうとして、なぜかちよつと沈黙した。

「社長、御質問はなんですか？」

「浦部君……あなたはいまのお母様とは、たしか、なさぬ仲だつたな……」

「……え、さうです。」博巳は、やゝ苦しげに微笑した。

加島は、また、ちよつと沈黙したが、

「あなたは、お母様をどう思ふな？」

加島の眞意を測りかねて、こんどは博巳が黙つた。

「どうだな、浦部君、あなたと、そのお母様とは、圓滑に意志が疏通してゐるのかな？」

「え……」博巳は澁つた。

「いや、こんなことを訊いては、はなはだ話が露骨で、またあなたを怒らせるか知らんが、わたしはどうもあなたの家庭に、この點がうまく行つてないと思ふ。實は時々頂くお父様のお手紙からそれとなく推察して、わたしはこれを疑つてゐるのだ。だからこの機會にあからさまにあなたに訊き正して置きたい。わたしの想像が間違つてゐれば、失禮をお詫びする。しかし、どうもわたしには、この一點が氣がかりなのだ。」

「社長の御想像の通りです。僕は家庭では、反逆者として取扱はれてゐました。——僕自身も反逆者たらんとしてゐました。」

「それはどうしてだ？」

「僕は繼母に、はじめは愛と尊敬を持たうとしました。しかし、それは全然無駄な努力でした

……それは、僕にも、たしかに、ひがみやすねた氣持はありました。が繼母は、僕の持たうとする愛や尊敬を、一々或る敵意とか反抗とかに受けました。時としては、無理にもさう解釋しようとする風さへ見えました。繼母のことを悪くいつては濟まない譯ですが、正直にいつて、繼母は勝氣なといふよりも驕慢な、神経質といふよりも疝強^{けんきやう}い、用心深いといふよりも疑心のはげしい人なのです。もちろん僕もたしかに我儘な少年ではあつたのですが、僕が八歳の時、浦部の家庭に入つて来て、間もなく道夫といふ弟が生れると、僕に對する態度がガラリと變つて來たのです。……で、僕は子供心にも、それが腹立たしくなる。家にゐて不快な目にあふより、外に遊んでゐるほうが面白い。さうして育つてゆくうちに、僕はいよゝゝ家になづまなくなる。なるべく外出して、慰樂を求めるやうになる——善友よりも悪友が面白い。いろんな放埒を覚える。たうとう仕末にをへぬ、立派な不良青年になつてしまつたのです。と、同時に、家庭からは、ますゝ反逆扱ひをされるやうになつたのです。」

「だが、君は、今家に歸つても、以前の君ではない。」

「歸る——といふことだけは、どうぞいはないでください。おゆるしくください。」

「だが——なんといつても、君は浦部家のほんたうの後繼者なのだ。歸らないといふ譯にはゆかない。」

「ですから、おのづから歸るべき日が來たら歸ると申してゐるのです。」博巳はキツと言ひ放つた。

「よろしい。では、とにかくあんたの決心を、お父様にお知らせしよう。」

「どうぞ、よろしく願ひいたします。」博巳はおとなしく頭をさげて、すぐ仕事にかゝつた。

「いや、大變お邪魔をしたね。」

加島は椅子から立ちあがると、博巳の手も觸れぬ書簡をポケットに入れて、笑ひながら室を出て行つた。

——さうして、また二ヶ月が過ぎた。

このあたり、南樺太は、十月下旬にはすでに雪を見、翌年の五月はじめを融雪期としてゐるのであるが、今年はやゝおそく十一月に入つて雪を見た。痛いほどにも冷い濃霧が時々山の一帶を隠した。温度は夕方から夜へかけて、必ず氷點以下であつた。森の仕事ははかどらなかつ

た。しかし實直で勇敢な「兄弟」達は、寒さやあらしには恐れなかつた。彼等はなるべく身輕な防寒服を着けて、樹々を鳴らす風雪の中をも、なんのとはかり働きつづけた。

加島の木材會社は、もとより彼の主張通り、單なる營利事業ではなかつた。月々の會社の收入と支出は、すべて發表され、利益の配分も精細に掲示された。そこに、森には、彼の經營の幾年間、なんの不平不満の聲はなかつた。たゞ加島に對する敬慕と、會社の順調な發展とのみが、高まり進んでゆくばかりであつた。

博巳は、吹きさらしの森に働く兄弟達を思ふ時、自分が樂に、事務所の一室に籠つて、暖爐のそばでペンを取ることを潔しとしなかつた。彼の室のみは、たゞ窓の硝子戸を閉めきつただけで、小さな火鉢すら置かなかつた、忙がしく愉快に働けば、こんな身體を動かさぬ仕事でも汗が出る活氣が出る——と、彼はデスクの上の書類の整理に餘念がなかつた。

「あの、浦部さん。社長さんがお呼びですが。」と、給仕がドアを開けてのぞき込んだ。

「あ、すぐゆきます。」

博巳は手早く、仕事に區切をつけて立ちあがつた。隣室が加島の部屋であつた。博巳の姿を

見るなり、彼は微笑で迎へた。

「なにか御用で？」

「あゝ、是非君に相談することがあつてな。まあ、そこへおかけ。」

博巳はデスクの前の椅子についた。

「なにか御用で？」

加島は笑ひながら、

「まあ、そんなに急かすともいゝ。」

「いや、社長の口から相談といふ言葉を聞きますと、僕はなんだか氣にかゝりますので。」博巳も笑つた。

「はゝゝゝゝ。そんなに心配することではない。だが、浦部さん、あんたはいつか、おのづから歸るべき日が來るといつたね。……實は、君に、東京へ行つて貰ひたいことができたのだ。わたしの事業は、幸ひにしてやうやく根據ができて來た。この際、仕事を一層擴張する必要に迫られて來た。で、こんど、いよく東京に支社を設けねばならぬと思ふのだが、その仕事を

ひとつ、君に主となつてやつて貰ひたいと思ふ。わたしはあの時君に約束し、君の厚意を有難く受けてゐたのだから、君を、君の家に返さうとするのではない。わたしの事業——この山の仕事のために、君に東京へ出て貰ひたいのだ。東京へ出て、君はわたしのため、またこの森の兄弟達のために働いてくれるのだから、異存はなからうと思ふが……」

博巳は考へに、加島は熱心に、

「どうだね。よくわたしの心持を察して貰ひたい。わたしはあなたに信頼してお願いするのだ。」

「社長、此會社のため、森の兄弟達のためといふのなら、どんなお仕事でもお引受けいたします。しかし、なにぶん責任の重いことですから、僕としては最善の努力はいたすつもりでございますが、経験もないしすることですから……信頼すると仰有いますと……」

「いや、あなたの心持はよくわかつてゐる。あなたがさうしてわたし達のために、献身的に働いてくれること——それだけでわたしは満足してゐる。仕事に努力する——それからさきは、所謂神のお審判だ。成功するとならないとは、わたし達の仕事、神の思召にかなふとかなはないとにある。そこまで心配してはどんなことだつて誰にもできない。たゞ、あなたは、わたし

の半身となつて、東京で働いてくれ、ばい、のだ。」

「さう仰有つてくださるのなれば、たしかに承知いたしました。きつと、一生懸命にやつて御覽に入れます。いつも、社長や森の兄弟達の心一つに、働けるだけ働いて御覽に入れます。」博巳は決意をもつて頭を下げたが、ふと考へたやうに、「社長。一つだけ、あなたに申しあげて置くことができますが。」

「一つだけ？ それはなんだね？」

「僕はこの木材會社の一使用人として、この會社の仕事のために上京するのだといふことでお引き受けしたのですから、その點を、どこまでも御念慮に置いて頂きたいので。」

「それはわかかつてゐる。どうして今更そんなことをいふのだね。」

「僕は上京いたしましても浦部の家には、一步も足を踏み入れませんからそのおつもりで。たゞ會社の仕事だけで上京するのでございますから……この點は、よく御諒解くださいまして、たとひ東京に着きましても、父には會はない。自分で會つていふといふ心になりますまでは、この山に生れた者が、用務ではじめて上京したといふだけのことにして頂きたいのです。浦部

の家を晴れて訪ふべき日は、またおのづからやつて來ると存じます。僕はもつと／＼人間になりたいのです。折角かうして教へて頂いた人間の眞實を、なにか自分の仕事の上に現はし得るまでは、このまゝ、社長のお手許で働かせて頂きたいのです。東京へ参りましたも、僕はすぐどこかに下宿して、そこから、新たに設けらるべき事務所に通勤するつもりでございますから……一つこの點を、是非、社長から父のはうへお話し置き願ひたいのです。僕は、來るべき日が來るまでは、たとひ父と、偶然途中で出會すやうなことがありましても、僕はしばらくの間は、まつたく未知の人として、ゆき過ぎてしまふつもりです。子として禮を缺くことになりませんが、その點を父にも、あらかじめ理解して置いて貰ひたいのでございます。」

加島は、再びジツと博巳を見つめた。

「よろしい。承知した。わたしはそのことをよくお父様に申しあげて置く。」

「それさへ社長がお聴き届けくださるなら、社のよろこばしい發展のためです。僕は明日にでも出發いたします。」

博巳は、元氣よく應へた。——加島はなんにもいはなかつた。強い感動をもつて、彼は握手

すべく、博巳の前に右手を伸べた。

森の「兄弟」達の、まつしくとも誠意をこめた、盛んな送別會が、博巳のために催された翌日、彼は出發した。

足かけ三年ぶりの上京——いろいろの思ひ出があり、感銘が深かるべき筈であるが、博巳はただ、樺木の山の森から、用務のみを帯びて、急遽上京した一社員として、上野驛へ着くなりまつしくらに、まづ下宿さがしに出かけた。支社の假事務所は、加島から東京の取引先に依頼して、すでに、麴町内幸町のDビルディング四階に一堂が契約されてあつた。で、彼はなるべく往復に便利であるやうに、神田淡路町の信盛館といふ安下宿を選んだ。一行李の荷物と、書類を詰込んだトランクだけの、氣輕な世帯を、二階の角の部屋に片づけると、手早く午餉をすませて、すぐDビルへ行つて見た。書棚二架、デスク一臺、椅子を五脚——取りあへず、これだけをちかくの愛宕町の家具店で買ひ入れ、それを運ばせて、位置をいろいろになほさせるとその足で銀座にちかい金庫商へ中型の金庫を注文した。

そんなことで、夕方まで、彼はひとり、汗みづくになつて働いた。

こつちで新しく使用すべき社員の選擇なども、すべて加島から一任されてゐたのであるが、これは充分時日をかけて銓衡を経ねばならぬことだけに、まづ當分は給仕一人に自分だけでいゝ。給仕はさしあたり取引先に電話をかけて、信用の置ける者を借用することにした。

——夜の九時頃、かたり疲れて下宿へ歸り、やうやく夕餉にありついたが、それを済ますと彼はすぐトランクから帳簿を出して、買入品目を書き入れたり、加島に宛てゝ手紙を書いたり明日からすぐ着手すべき仕事のために、ひと通り書類に眼をとほしたり、寢に就いたのが十二時を過ぎた頃——彼は、女中の敷いてくれた木綿の借蒲團へ、やつと手足を伸ばすと、そのまゝ快い熟睡に陥ちてしまつた。

翌朝は、七時に茶漬を搦つ込むと、すぐ事務所へ出かけた。取引先の挨拶にも廻らなければならぬ。——その日も一日、眼まぐるしい忙がしさで過ぎた。しかし、これさまづ、まがりなりにも仕事は緒に就く譯なので、彼はホツとひと息ついた氣持になつた。その翌朝、彼の眼ざめたのは八時に近かつた。

「いけないぞ。すこし氣をゆるませると、こんなに寝坊する。」

彼は苦笑しながら寢間着の上に羽織をひっかけけるなり、齒楊子をくはへて、縁づたひに狭い妙に暗い小庭を見おろす洗面場へ行つた。口をすゝぎながら、彼は山の森のことを考へた。

「今頃はもう、みんな元氣よく雪のなかで働いてゐるだらうな。そろそろ吹雪の暮る時分だが……」

彼は、ちよつと廂合ひさしあひから、鈍い鉛色の雲が厚く疊んでゐる冬空を見あげながらつぶやいた。

「浦部さん。電報がまゐりました。」と、背のづくぐりと低い女中が一通の電報を渡した。

「有難う。」

顔を洗ふ前に、彼はすぐそれをひるげて讀んだ。——スベテカンシヤ、アマリムリシテカラダヲコワサヌヤウ、カシマ——とあつた。加島の醇樸な恩愛にみちた心持が、このわづかな二行にも、うれしく滲み出てゐた。博巳は頂くやうにして懐中に入れた。

——洗面場から部屋へ戻ると、もう掃除が済んでゐた。膳が出てゐた。

博巳はドツカリあぐらをかいて新聞を膝に、味噌汁の椀に手をかけようとしたところを、廊

下の障子が開いて女中が長まつた。

「お客さまでございますが。女の方で。え、奈津子さまと仰有いました。さう申せばわかるつて。」

「奈津子？」

博巳はハツとした。——姉が訪ねて来たのである。なつかしい實の姉が——

自分は上京してから、浦部の邸へは一切たよりをしなかつた。しかし加島からは知らせが行つてゐる筈である。姉は久しぶりに喜んで訪ねて来たのであらう。會はう！ 父にも繼母にも邸の誰にも會ふつもりはないが、姉には會つていゝ。姉は別ものだ。あのなに事にも自分を心配して、蔭からいろいろ自分を庇つてくれた姉、恩愛の深い姉——會はう！ 久しぶりだ。

「あゝ、通してあげてください。」彼はうなづいた。

蔭のうへの新聞を片づけ、膳をわきに寄せてゐるところへ、

「こちらでございます。」

と、廊下に女中の先に立つて案内する足音がした。

障子が開いた。

「あ、姉さん！」

「博巳さん……」

そこに、温雅な身づくろひをした姉の姿を見、また、日焼けた額、質素な木綿飛白を着た弟の姿を見た時、兩人は互の健康をよるこび會ふやうに、一瞬、ものも言へなかつた。姉の眼には、もう涙があつた。

「まあ入ってください。こんなところです。はゝゝ。」

座蒲團も一枚しかないので、博巳は自分の敷いてゐるのを裏返しながら勧めた。

「いゝえ。いゝのよ。」

「まあ、姉さんは女だから。」

姉弟は、はじめて笑つた。かうして、顔を向きあはすと、なにから話していゝやらわからなかつた。ことに奈津子は、胸が一杯らしく、たゞ以前からすっかり一變した博巳の態度を見つめたまま、一語も發し得ない風であつた。

「姉さん、どうです。僕働けるやうになりましたよ。働くことが面白くつてたまらない人間になりましたよ。」博巳は、子供のやうに肩をゆすつた。

「加島さんから、時々お父さまにおたよりがあるので、わたしはいつもあなたのことでは喜んでゐるのですよ。ほんたうに……よかつたわ……」奈津子は聲をつまらせた。

「もう大丈夫です。もう姉さんには以前の御心配なんかかけません。いや、以前のことになると、なにかからお詫びしていゝかわからない。随分姉さんを困らせたからな。は……は……」

「そんなことはもう言はないこと……わたしはすっかり安心してゐるんだから。さうして、こんなに立派な人になつてくれたことを、どんなにか嬉しく思つてゐるのですから。」

「立派の人？ いや、立派な人になるには、まだ……これからですよ。これからしつかり働かぬいて、人間らしい人間になつて御覧に入れますよ。たゞ、今のところは、姉さんに、心配をかけなくなつたといふ程度なんです。」

——こんなことがいへるやうになつたかと、奈津子はまたしても涙ぐんだ。

「おや、博巳さん、あなたはまだ御飯が済まないのね。」

「ええ。この頃は七時起床、八時半出勤にしてゐるんです。で、今、朝飯を食べやうとした時に姉さんがいらつしつたといふから、ちよつと中止した譯なんです。」

「さう。」奈津子はニツコリして、「ぢや、御飯をおあがんなさい。わたし、お給仕をしてあげよう。」

「いや、大丈夫。こゝでも僕ひとりかよそふことにしてゐるんだから。は……は……」

「まあ、いゝぢやないの。わたしがお給仕してあげますよ。」

奈津子は、博巳の傍らから、櫃を引きよせた。

「さうですか。済まないなあ。」

笑ひながら、博巳は膳を前に置きかへて、茶碗を出した。

奈津子は、櫃の蓋を取つたが、

「おや、よく炊けてないやうね。」

「姉さん、樺太の膳は、まだ……こんなぢやありません。なにしろ炊事係が荒くれた人夫で亂暴ですからな。」と、博巳は山の朝夕の副食物まで説明しながら、「しかし、そんな粗食でも

加島社長以下みんな同じに満足して食べてゐる。もつとも、森で働いて、腹のペコ／＼した時に食ふ飯は美味いからなあ。」

「さうでせうね。博巳さんは、學校にゐた頃から身體のはうは丈夫だつたけれど、がうして會つて見ると、まつたく肉つきが、がつしりして來たやうよ。」

「でも、東京へ來てから、まだ日が經ちもせんのに、なんだか身體の節がゆるんで來たやうですよ。山にゐると、事務を執つてゐる暇には、斧をかついで森に出かける——今頃は、すつかり雪が積んでゐますが、その雪の中で、森を鳴らすやうな寒い風に向ひながら、山の唄をうたつて汗の出るほど働くんです。愉快ですよ。」

「聞いたよけども、勇ましいお話ね。」奈津子は微笑しながら、飯をつぎかへてやつた。

——山の兄弟の美しい眞情——さうした眞情をつくつた加島の尊い人格などを説明してゐるうちに飯は終つた。

「あ、姉さんにお給仕して貰つただけで、お茶ひとつ出さなかつたな。」博巳は手をたゞかうとしました。

「まあ、いゝのよ。ほんたうに、なにかもわたしは嬉しい。これから時々、御用のない時にわたしはこゝへ來よう。」

「え、どうぞ。」と、博巳はいつたが、「しかし姉さん。僕はその前にいつて置きますがね。姉さんに遊びに來て頂くことば有難いが、僕は今度はあの會社の出張員として上京したわけなんだから、その心持をお忘れならないやうに。」

「え、さういふことは、お父さまからも伺ひました。お父さまも、あなたが自分で食ふといふまでは會はないであると仰有いました。」

「さうですか。それを諒解して頂ければ僕は満足です。僕は姉さんだけは、特別の氣持で會ふのです。この氣持は、無論姉さんにもおわかりでせう。だから姉さんはいくらこゝへ訪ねてくだすつても構はないが、僕のことばは邸へ歸つてお話しくださいらないやうに。そして、邸のことばも、こゝでは一切お話しなさないやうに。」

「わかりました。わたし、博巳さんの氣持なら、今でも以前でも、みんなよくわかるのです。」

「有難う。やつぱり姉さんだ。」

或る感動の沈黙があつた。

「さあ、八時半出勤といふのなら、そろ／＼お支度なさいよ。」

博巳は腕時計を見た。

「あ、さうだな。では、失禮して、こゝでちよつと着かへます。」

「手傳つてあげませう。」

「いや、今のお給仕で充分。」

兩人は、顔を見あはせて、また笑つた。——博巳が着る洋服は、以前のやうな、華奢な贅澤なものではなかつた。彼は社から仕給された、黒い羅紗の、質から形まで、粗末なダブついた背廣だつた。奈津子は、なにかから何まで變つた博巳を、頼もしげに見やつてゐた。

「さあ、着かへが済んだら、そろそろお出かけなさい。わたしもその邊まで、一緒にすこし歩ませせう。」

「折角訪ねてくださった姉さんを追つ立てるやうだが。」

「いゝえ、これからまた、ちよ／＼よく來ますから。仕事で邪魔な時は玄關拂ひでいゝのよ。」

ぼ／＼／＼。

——小川町の角まであるいて、姉とわかれた博巳は、そこから勢ひよく電車に飛び乗つた。

彼は、混んでゐる乗客の中に、さわやかな心で揺られながら立つてゐた。内幸町で降りると、まつしぐらに、Dビルへ駈つけた。

第四一號室——そこが彼の假事務所で、窓から日比谷公園の、霜枯た樹々や、遠く司法省海軍省外務省などの官廳や、帝國ホテル、帝劇のあたりが見渡された。東北に向いて日當りはよくなかつたが部屋はいつもあかるかつた。

彼がドアを開けると、給仕の笹井が、入口の小卓によつて雑誌をひろげてゐた。あわてて雑誌を閉ぢて、椅子から立つと頭を下げた。

「御苦勞さま。早かつたね。」

「え、唯今、室の掃除を済ましたばかりで。」

「さうかね。」と、彼はすぐ金庫を鍵で開けながら、「笹川君、その雑誌はなんだい。」

「工業青年て雑誌です。」

書類や帳簿を、自分でドシ／＼デスクへ抱へ込みながら、博巳は、

「ふむ、君は工業志望なのかね？」

「ええ。航空機の仕事をやって見たいので。」彼は頭を掻いた。

「頭を掻かないでもいゝよ。それは立派なことだ。神田の夜學に行つてゐるのだね。」

「ええ、S工手學校です。」

「勉強の都合があるならいひたまへよ。こゝの時間は早く切りあげさせるから。」

「はあ。」と、給仕は嬉しげに頭をさげたが、自分の卓の上からひと束の封筒を恭々しく持つて來ながら、「これが参つてゐました。みんな履曆書在中の手紙で。」

「ふむ、昨日の新聞に、あんなに小さく廣告を出したのに、もうこんなに來たのかね。驚いたな。」

「なにしろこの頃は大學卒業生が、餘つてゐるやうですからね。」給仕はまた口を利いた。

「さうだね。そこへゆくと、笹川君なんぞ、一時、君の店から無理に拜借したのだが、君の店

とこの事務所と引つ張り風なんで、えらい譯だな。」博巳が笑ふと、笹川はまた頭を掻いた。

——かうした談笑裡に、博巳はテキパキ事務を片づけて行つた。五時には笹川に暇をやつて歸すが、彼一人は、あとに残つて、六時、七時——九時頃まで事務を執ることはめづらしくなかつた。出勤は電車だが、歸途は運動がてら、淡路町の下宿まで徒歩することが多かつた。

愛 憎

——毎日彼は、Dビル事務で懸命に働いた。

ほとんど百に近い事務員志望者の中から彼は銓衡して四人を選んだ。——三宅、舟橋、辻、富永。そして、一時借り雇ひした笹井に代つて、小田といふ、才氣よりも着實一方の給仕を採用した。すべて六人——支社もこれで陣容が整つた譯である。

主任としての博巳は若かつた。が、新しい社員と給仕は、快活で機敏で沈着でしかも果敢な彼の執務振りによるこんで服従した。事務はテキパキ進行した。取引は發展した。

相變らず博巳は、よく部屋に居残つた。事務員も、彼と共に働かうとしたが、彼はちやんと

規定の時間を勵行して、給仕まで、退社の時間には歸すことにした。

「お疲れでせう。」

と、やゝ氣まり悪げに帽子と外套を持つて挨拶する事務員に、

「なぬに大丈夫です。あなた方にかうして忠實にやつて貰ふお蔭で非常に成績がいゝ。社長もいつも安心したといつて來る。今年は一つウンと支社の働き振りを見せて、ボーナスを請求するんですね。」と、博巳は禮を返しながら笑つた。

若いに似ず譯のわかつた、謙讓な主任だと、事務員はDビルの階段を下りる時、よく噂して感心し合つた。彼等はまだ、博巳が、あの時めく浦部子爵の嫡子であることは知らなかつた。

——例によつて、博巳は歸途を下宿まで徒歩した。

昨日から續いた寒い雨が、夕方やうやくやんだが、今夜もひとり執務して、九時ちかくDビルを出た。そして、泥濘つた道を拾ふやうにあるいた。

「やい、こんなに泥を跳ね飛ばしやがつて、失敬な奴だ。なんとかいへ。」

彼が、大手町の電車の交叉點ちかく來た時、暗がり、こんな聲がした。

そこに、一臺の自動車へ二人の洋服を着た不良青年らしいのが、意地悪げに食つてかゝつてゐた。

博巳は思はず足をとめた。——自動車の中には、チラと見ただけであるが輪廓の整つた、若い女性の横顔があつた。

「貴様は不都合だぞ。こつちがよけようとするはうへ、わざと自動車を向けて來やがつて。なんか意趣でもあるのか。おゝ。」

「いゝえ、決してそんな。わたしが危いと思つてハンドルを曲げたはうへ、あなたが周章て……」

運轉手は、困つたやうに頭をさげた。

「なにおれが周章た？——やい。自動車なんか周章るやうな百姓だと思つてやがるのか。いよいよ生意氣なことをいふ奴だ。」

「こんなに泥をぶつけて置きやがつて、それを謝罪おやまらうともしないで、まだそんな御詫ごわをつきやがるのか。やい、用がある。降りろ。」

二人の青年は、したゝか酔つた風に舌なめづりしながら、運転手窓に片足かけて怒鳴りつけた。

125

「ですから、さつきからお詫びしてるぢやありませんか。」

「なに？ なにをお詫びしたんだ？ お詫びならお詫びらしく詫びる。變に理窟ばつた口を利きやがつて——それが生意氣だといふんだ。」

「まあ、なんでもいゝ。降りる。用があるから降りる。」

「どうぞ。こちらの粗相でございましたから、おゆるしくださいますして。」

自動車の中の女性は、窓の硝子を下ろして、つゝましやかに運転手に代つて頭をさげた。

「ふむ、どこの御令嬢か知らないが、この自動車がお前さんの家のもんなら、乗つてゐるお前さんにもひと文句あるんだ。大體おれ達あ、こんな道を他人の迷惑も構はねえで、自分ひとりが急ぐからつて、さんざ泥を跳ね飛ばして優越感を感じようとするブル氣質が癪に觸つてならねえんだ。おい。お前さんは家に歸りやあ、そりや御立派な着替への何十枚もおあんなさうが、おれたちはこれ一枚の着たつきりだ。こいつを洗やあ素ツ裸はだかでゐなきやならねえんだ。」

どうしてくれるんだ。」

青年の一人は、わざとらしい、労働者じみた言葉を使った。

「それはなんともお氣の毒でございます。お詫びはあとで、どんなにでもいたしますから。」

もうそろ／＼人立ちのしかけてゐるあたりを、きまりわるげに見やりながら、女性は呼聲に謝罪した。

「お詫びはあとで？ ふむ、あとでたあなんだ。お詫びならすぐこゝでしろ。うま／＼逃げ出してしまやあ、明日あ知らん顔でゐるのが、當節のブルだ。かたあつけて行かなけりやあ承知しねえぞ。」

他の青年は、かさにかゝつて嚇すやうにいつた。

——博巳は、衝つと人だかりの間を分けて入つた。

「どうしたのです？」

「……？」

二人の青年は、横合ひから現れた彼をチロリと見た。

127

「どうした譯なんです？」

「ふむ。」一人は、鼻さきでせうら笑つたが、「お前さんは誰だね。」

「僕は浦部つていふ者です。」

「お前さんは、こゝに、かなり前から立つて見てゐたやうだつたが……」

「見てゐました。」

「見てゐりやあ、どうした譯くれえはわかつてゐるだらう。」

皮肉に、二人は笑つた。

「いや、およそのことはわかつてゐる。だが、あなた方は、どうした譯で、こんなに詫びてゐられる人達がゆるせないかつていふんです。」

「なに、どうした譯でゆるせないつて？——ゆるせないからゆるせないといふんだ。」

傲然と、二人は見返つた。

「しかし、最前から聞いてゐるとあなた方のいふはうが、すこし無理のやうに思はれますが。」

博巳は靜かに押しなだめた。

「なに？ おれ達のはうが無理だつて？」

「え、無理のやうに思はれます。いらぬところへ口を出したくはないが、かうして、粗忽を謝罪あやまつてゐるからは、これ以上あなた方はお咎めなさらなくてもいいと思ふ。これからこんなことのないやうにと戒めて、それでゆるすべきぢやありませんか。ことに自動車には女おんなの方が乗つてゐられて、どんなにでもお詫びするからといつてゐられる。」

「どんなにでもお詫びするつていゝ加減なところで逃げ出さうとしてゐやがるぢやねえか。」

「いゝえ、決して逃げるのなんのと申すのではございません。わたくしは牛込加賀町の……」
と、女性がいひかけるのを、博巳は遮るやうに、

「まあ、これはちよつとした災難だつたと、ゆるしておやんなさい。ねえ、運転手も、乗客もかうして平謝罪ひらあやまにあやまつてゐるんだから、それでいゝぢやありませんか。」

「いゝや、よくはねえ。やいお前の家うちあ牛込加賀町か？ 加賀町ならおれはよく知つてゐる。

加賀町の何丁目何番地で、なんといふ家の自動車クルマなんだ？」

「そんなことを聞いてなにをするんです。」

「なにをしようとかつちの勝手だ。」青年の一人は博巳を突きのけた。

「おい、貴様達は、それを聞いて、明日にもゆすりに行かうつていふのか。」博巳はガラリと調子を變へた。キツと二入を睨めつけた。

「なに、ゆすりに行く？——こいつ、失敬なことをいやがつたな！」

「失敬とは思はない。ゆるすべきをゆるさないで、そんなに執念深く言ひがよりのつけりやあ誰だつてさう思ふ。」

「なにをつ、こいつ！」

不意打ちに、他の一人の拳は、博巳の頬をめぐけて飛んだ。——と、油断しなかつた博巳、バツと一步すすつて空をうたせ、よろめくやつを、襟髪つかんでグンとはたいた。前のめりに彼は氣味よく泥濘へ棒つ倒しになつた。

「や、こいつ、腕立てしやがるかつ！」一人は、両手をひろげて飛びかかつた。

「あつ……あれ！」自動車の女性は、思はず窓から顔をのぞかせた。

「運轉手！ いゝから自動車をやれ！ あとは僕が引き受けた！」博巳は叫んだ。

いゝ機會と、運轉手は頭をさげるなり、グ、ウーと、ハンドルをとつて、神田橋のはうへ走り出させようとした。

「まあ、お待ち！——お待ち！」女性は叱るやうに運轉手を制した。

「早くやれ！ 早く！——あとは僕が引きうけた！」

さういひながら、博巳は肩に手をかけようとする一人を、こつちから胸倉を搦んでひき寄せさま、大外刈で、右へモンドリうたせて投げつけた。

「あ、あれ、お待ち！」

身をもんであせる女性を乗せたまま、自動車は、もう二三十間彼方を、まつしぐらに走つてゐた。

「こいつ、やりやつたな！」

「どうするか見てゐろ！」

左右から拳を振りあげるやつを博巳はまた一步さがつて、こつちの拳に頬を嚙ませ、片足では腹のあたりを蹴つけた。二人は、また見事に、泥濘の上に折り重なつて倒れた。

「身をひるがへすやうに群衆を招りぬけて、素早く内務省の前まで、暗りにまぎれてしまつた博巳は、あとをも見ないで大股にあるきながらひとり苦笑した。

なんだか今夜の自分は、以前の喧嘩好きで亂暴だつた頃の、復習をしたやうである。大人げない、馬鹿々々しいことをしたとも思つたが、あの場合しかたがない。言ひがりをつけた彼等の目的はわかつてゐる。以前の自分の仲間にもあつた奴は多かつた。さすがに自分は首領株として、ゆすりやぶつたくりこそやらなかつたが、縄張り争ひの喧嘩には決して敗北をとらなかつた。——考へて見れば、なんといつても愚な自分だつた。あつた不良青年達の行動を見るにつけてもつくづく自分が恥かしい。

博巳はひとり苦笑した。

——働く！ 傍目もふらずに働く！ 人間となるためにたゞ働く！

さう思つてゐる博巳にも、一日の慰めはほしかつた。仕事もかうして順調以上に進む。もうそんなにまで執務時間を越えて、事務所に居残ることもすくなくなつた。日曜日は樺太でも山

は休みである。この日は午前に加島社長が例の物やらかな、そして熱意をこめた訓話をするほかは、極わづかな夜業がはりの仕事の後、てんでにくつるいで雑談やら讀書やらに、一日を愉快に暮すのであつた。日曜でも彼等は働きたいと願つた。月に一度か二度の骨休めで充分だと彼等はいつた。しかし加島は敬虔な基督教信者として、日曜は安息日として守ることを主張した。この日は自分も讀書して心の糧を得たい。みんなもこの書物なり雑誌なりを読んで知識を得、修養に志すといつた。——博巳は上京してからも、加島の註文で、山の兄弟達に読ませるための本を時々買ひ集めては送つた。加島は會社へ立派な圖書室をつくりたいと計畫してゐた。

——この日曜は久しぶりに残された仕事もない。一日自分の身體で遊べる。博巳は新聞の廣告欄を見た。T劇場の歌劇——たゞ綺麗ごとといふだけで、理窟なく、氣樂に見物ができる。仕事疲れを休めるにはこんなものがいゝ。彼はうなづいた。例の身なりをかまはぬ洋服で、下宿を出ると電車に乗つた。

華やかな劇場の入口で彼は二等席を奮發した。今の自分にはすこし贅澤だとは思つたが、ま

あ今日一日の慰安だと、思ひきつて一枚買った。

まだ開幕の呼鈴の鳴らぬ前で、廊下には見物がザワ／＼湧るいてゐた。博巳は、まるでストレンジアアのやうな氣持で、壁に凭つた。

——と、通りかゝつた二人の令嬢、「あ。」と驚いたやうに足をとめた。

博巳は眼をあげた。

「……？」

彼は意外なやうに、もう一度見なほした。あの晩、不良青年に困らされてゐた自動車の中の令嬢だつた。

「まあ。」令嬢は挨拶した。

「御見物ですか？」

「……はあ。」令嬢はつゞましく微笑して、「こんなところでお目にかゝるとは存じませんでした。あの晩——有難うございました。お蔭さまで、ほんたうに危いところを。」

「いや、そんなこと。」

兩人はまた頭をさげた。

「あの晩、あゝした時でわたくし名前を申し上げませんでした失禮いたしました。わたくし室谷愛子と申します者で。」

「あゝさうですか。わたしは浦部博巳といふ者で。」

「あの晩のこと、歸つて両親に申しましたら大變喜びまして……御住所はどちらでございますか？」

「え、——神田のちつぽけな下宿にゐるんです。」

「わたくしお名前も御住所も伺ひませんでお別れいたしました。それはいけないと、大變叱られたのでございますの。」彼女は伏目に笑つた。「お宿はどちらでございますか？」

「いや、ほんたうにお恥かしい、ちつぽけな、汚い下宿です。」博巳はあかさうとしなかつた。

「失禮ですけれどもどこかへお勤め遊ばしておいでなやうに存じますけれど……」

「え、これも申しあげるほどのところではありません。内幸町のDビルに小さな假事務所を設けてゐる位の……」

「なんて申す會社でございますませう？」

「え……」博巳はしかたなく、「加島木材會社の東京出張所といふのです。」

「あ、さやうでございますか。」

彼女は心に練り返へすやうにうなづいた。それで會話は途切れたが、兩人にはまだなにか物足らぬ心持が残つてゐるやうだつた。

「なんだ、愛子、なにをしてゐる？」

彼等の横あひから太く濁つた聲がした。黒眼鏡をかけて、鼻下に刈り込んだ髭を蓄へた脊の高い紳士が、ツカ／＼と歩み寄つた。

「あ、お父様。」

愛子が見あげるのを、構はず博巳へ、眼鏡のうしろから鋭い迂散臭さうな眼をやつたまゝ、

「こんなところで、なにをしてゐるのだ？」

どつちつかずに聞えるやうなことをいつた。突嗟ではあるが、博巳はこの人物に、あまりいゝ印象を興へられなかつた。これが愛子の父かと思つた。

「お父様。このお方ですわ。いつか、あの大手町の角で、わたくしが自動車にいひが／＼りをつけられて困つてゐるのを救ひくだすつたのは。」

「なに、この方？」チロリと、また眼が光つたが、「さうか。この方か……」

「お父様、どうぞお禮を仰有つて。」

彼はやゝ態度を改めたが、

「いや、これは失禮しました。わたしは愛子の父で、室谷專治といふ者で——その節は、愛子のために、いろ／＼お口添へやらまたお力添へくだすつたさうで、有難くお禮申します。」

お力添へといふ言葉が、博巳の耳には妙に皮肉に響いた。自分があの時、不良青年を投げ伏せたことを、或る意味で揶揄してゐる調子にも感じられた。彼は單に苦笑して、

「いや、たゞ通りがかりだつたもんですから。お禮などいつて頂くと恐縮です。」

「お名前もお住所も伺つてありますのよ。」と、愛子は父の傲慢らしくそつけないのを、博巳に詫びたいやうな眼を向けながら、「この方、浦部博巳様と仰有いますの。」

「なに、浦部——博巳さん？」

室谷は、どこか怪しむやうな顔で、博巳を見た。その時開幕のベルが鳴つた。

「では。」博巳は軽く一禮した。

「これはお見それいたしました。」室谷はあわてたやうに帽子を脱つて、改めて鄭重に頭をさげながら、「浦部博巳——さん。それでわかりました。あなたは浦部子爵の御令息でせう？」

「えつ……？」

博巳は驚いた。愛子はなほさら驚いた。

室谷は委細かまはず、また頭をさげなほしながら、

「いや、どうもお見それいたしました。あなたはわたくしを御存知じありますまいが、わたくしは、お邸へ参つて、應接間から、あのわきのテニス・コートで、あなたがよくテニスをなすつてゐらつしやる所を拜見したので、お顔は存じてゐるのです。わたくしは、閣下には年來の厚い知遇を受けてゐる者でございます。どうもどこやらお目にかゝつたお顔だとは思ひながら……すつかりその……以前とちがつてゐらつしやるのをお見それして失禮いたしました。なんでも樺太へしばらくおいでになつて、近頃東京へお歸りなすつたことも、この間お伺ひ

たしました時に、ちよつと閣下のお口から承はりました。いや、どうもすつかりお見ちがひしたものですから……ほんたうになんと……」

次の幕間、室谷のはうから博巳の場席を探しに來た。一等席のちやうど自分達に近い椅子が一つあいてゐるから、そこへおかはりなすつてはと、しきりに勧めたが、博巳は辭退した。すると、なんでもすつしお話したいと言つて、無理やりに食堂へ誘つた。愛子も「どうぞ」と目禮するので、しかたなく博巳はあとについて行つた。

「かうした時代で差上げるものもございません。こゝには酒もないやうでして。」と、笑ひながら室谷は椅子に凭つた。

「いや、酒はまるで駄目す。」博巳も笑つた。

「でも、なか／＼飲ける口でゐらつしやる——と、そのことは閣下からもよく伺つて、知つてゐるのです。」

「以前は飲みました。思ひつきり強い酒ばかり、無茶苦茶にやつたものです。酔つたまぎれにさかんに喧嘩もやりました。父も姉も僕の亂暴に、驚くよりも呆れてゐた位なんです。まつた

く毎日ひどい生活 した。は、は、は。」博巳はさらに笑つた。

愛子は、この人が——といふやうに、ちよつと眼を腫つた。

「いや、さう仰有れば申しますが、あの頃は閣下も、よほどお困りのやうでしたよ。わたしが参ると、お話の序に、あなたのお話がよく出ました。」室谷もまた笑つたが、「しかし、この閣下を御訪問すると、ふとお話があなたのことになつて、あなたが樺太の御修業で、すつかり立派な人物になられたことを、大層御満足の御様子でした。一度會ひたいものだと思つておいでになりましたが、かうして東京にお出になつて、なぜお邸へいらつしやらないのでございませう」

「いや、その時期ではないのです。もつと働いて、自分で考へてゐる眞實の生活を営み得るやうになるまでは……」

「もうあなたはそれで御立派ぢやありませんか。」

「駄目です。まだ仕事にも生活にも、一人前のこと——誰にも恥ぢずに言ふことのできることをしてゐないので。夜下宿に歸つて、自分の過した一日をジツと考へると、反省の足りない

鞭の足りない思ひがします。」

「しかし、あなたはいつまでもさうしてゐられる方ではない。あなたはなんといつても浦部家をお繼ぎなさらねばならないお方です。やがてはお家の名譽と地位を一身に擔つて、政界財界に打つて出られなければ……」

「いや、僕は父の名譽や地位を受けようとは思つてゐません。父の名譽と地位とは父のつくつたもので、僕自身のものではないのです。」博巳はやゝ不快な顔をした。

女給がスリーブとパンを運んで來た。

「どうぞ……頂きながらお話しいたませう。」

「有難う。頂戴致します。」博巳は軽く會釋した。

——愛子は、最前からの會話に、一々驚きながらも、幾度も博巳の顔を見なほした。この健實らしい人が、以前は粗暴な放縱な青年であつたことも意外だし、またそれが、あの政界財界に今を時めく浦部子爵の令息であつたことも、意外の意外である。しかし、また考へて見ればかうした構はぬ質素な風體をしてゐながら、そこに同じ難い氣稟があり品格がうかゞはれる。

やつぱり氏であり育ちである。——彼女は、また、今更のやうに博巳を見た。

室谷は飽くまで感心もし、忠義立てする顔で、續いて選ばれる皿や飲み物を勧めながら、
「いや、あなたの仰有ることは御立派です。閣下の名譽と地位とは、それはたしかに閣下のものです。だが、あなたは社會の當然の規定として、どうしてもそれをお受けなさらねばならぬお身の上です。受けるとか繼ぐとか申す言葉は、進取の氣に富まれたあなたにお嫌かも知れません。しかし、繼いだものを、より偉大に、より光輝あらしめれば、それはまた新しいあなたの名譽であり地位である筈でせう。」

「どうも僕はそんな解釋にうなづきかねるのです。僕はどこまでも自分を守つて、自分の眞實な生活を進めてゆきたいのです。」

「いや、失禮ですが、そこがまだあなたのお若いところですよ。あなたがさういふ氣持であらつしやつても、世間がそれを許しません。いつかあなたはお邸に歸られて、浦部家の人となられねばならないのです。さうした時當然受くべきもの繼ぐべきのがあなたの双肩にかゝつて來るのです。あなたが浦部家の大事な御嫡男である以上、それはあなたの義務なんです。御先祖

や、また父君たる閣下に對するあなたの孝道もお樹てなさらなければなりません。」

「さうですか……」

論すべき人でもないのに、強ひて主張したところで無意味であると思つた博巳は、いゝ加減にあしらつた。

「さうですとも！」と、室谷はナイフの手をとめて、「さうでなくてはなりません。いや、やがてあなたが浦部家をお繼ぎなさる時が参りませうが、その時にもやはり閣下同様、この室谷をお引立てくださいますやうに。これは唯今からよろしくお願ひいたして置きます。」

博巳は改めて頭をさげる室谷に不快な苦笑を覺えた。彼は黙つてスプーンを動かした。

——彼等の食卓から斜めにあたるうしろの食卓に、最前からジツと博巳の姿に眼をつけ、どんな言葉も聞き漏すまいとするやうに耳を澄ませてゐる若い派手づくりな洋装の女があつた。それには博巳も氣がつかなくかつた。無論室谷も愛子も氣がつかなくかつた。

「そんなに急がなくつてもいゝわよ。」

——閉場で、室谷が下宿まで自動車で送らうといふのを強つて断つて、劇場の玄関で別れた博巳が、暗い帝國ホテルの通を、日比谷公園の停留場へと歩き出した時、うしろでこんな聲がした。

だが、彼はそれが自分に呼びかけられたものとは思はなかつた。

「なぜ待つてくれないの。もうわたしの聲を忘れてしまつたの？　え、浦部さん。博巳さん。」
姓名をハッキリ言はれたので、怪んで博巳は振返つた。わざとらしい小走りで、近づくなり彼の右の手首を掴んだ洋装の女——

「わからない？　わたしがわからない？」

「あ！」博巳は驚いた。

麻知子——

あの、反省も自覚もなかつた時代の、相手の女だつた！

「……………」

「びつくりしただけなの？　よろこんでくれないの？」

「……………」

「なぜ黙つてゐるの？　麻知子つて呼んでくれないの？」

抱きつかんばかり身を寄せる女を、博巳は静かに押しつけた。

「あら、どうして？　麻知子よ。よく見て頂戴。麻知子よ！」

「わかつてゐます。だが……」

「だが？　だが？　——なんなの？」

「もう以前の浦部博巳は、この世の中にはゐないのです。」

「それはどういふ意味なの？　もうわたしには、以前の心持で會ふことはできないつてことなの？」

暗くはあるが、彼女が肩をビリ、と震はせるのがわかつた。

「なにもかも過ぎ去つたのです」

「そんなことが、あなたの口から言へますの？」——博巳の他人行儀な調子へ釣り込まれるやうに、彼女も堅くるしくなつて、「三年前、あなたが樺太へやられる時、あなたはいひまし

た。いつまでも自分の心持は變らない。僕を信じてくれ。僕はどこまでもお前を……」

「あの頃の僕とあなたは、たゞ我儘に自分だけのことを考へてゐたのです。社會の制度とか道徳とかいつたものを無視する——と、いふよりも、全然知らない人間なのでした。考へて見れば愚かでした。いや、恐ろしいことでした。」

「そんな言葉聞きたくはありません。いゝえ、聞きたくない。浦部さん。わたしはあなたを待つてゐたのよ。あなたは、わたしがあんなにも手紙を出したのに、一つも返事をくださらなかつた。でも、わたしはあなたを信じてゐたのです。待つてゐたのです。あなたは東京へ歸つて來ても、わたしに知らさうとなさらなかつた。でも、御覽なさい。わたしちやんとあなたを見つけましたわ。今夜のT劇場の食堂——あなたがお綺麗なお嬢さんそのお父さんと、話してゐらつしたことを、ちやんと見つけてしまつたのですわ。もう駄目。わたしの手からあなたを逃しはしない。あんなお嬢さんがついてゐやうと——」

博巳はこの女の相手になつてゐることに耐へられなかつた。彼は黙つてグン／＼大腿に歩き出した。

「まだ澤山話があるのよ。さ、これからわたしと一緒にどこかへ行きますせう。そこでゆつくり……」

麻知子は追ひすがつた。博巳の右腕に、自分の腕をからみつかせやうとした。不快不潔なものを感じるが如く彼はサツと身を開いた。はづみを食つた彼女は前のめりにバタリと倒れた。

その際に彼は走り出した。

「卑怯よ！ 卑怯よ！ いゝえ、わたし、もう、逃しはしない！ なんだつて、逃がしはしないから——」

恨めしげに叫ぶ聲が、うしろから聞えた。

檻

「もう、ちぎ、上野かね？」

迂遠らしい聲で、つい前に席を占めてゐる田舎者の老人から訊かれて、加島はうなづいた。

「え、今浦和を通りすぎましたから、こんど赤羽でとまると、その次は上野です。」

「お、さうかね？ そんならそろ／＼支度にかゝるべえ。」老人は、脇に腰かけてゐる二十歳ばかりの、正直で着實らしい若者を顧みた。

「あ、若者は、あわてたやうに立ちあがつて、網棚から風呂敷包みや洋傘をおろしかけた。

「いや、まだ二三分はかゝるから、ゆつくりなさるがよいですよ。」

「さうかね。それでも汽車がついて忘れ物しちやなんねえから、お前、早くおろして置くがえよ。」

「あ、若者は、すなほに荷物をまとめて、膝の上にのせ。」

「驛を降りたら、人が混雑こみだふで、まごつくでねえぞ。それから行李受取るのを忘れめえぞ。」

「あ、。」

それで安心したらしく、老人は足もとの辨當の空殻の上から箸を一本つまみあげて、脂あぶらだらけのなたまめの煙管の灰皿を、ほじくりはじめた。

かうして、驛の名や到着の時間を教へることが、加島にはなんだか苦笑された。自分も、もう三十年振りといつていゝやうな、今度の上京なのである。窓から見渡す森や野原や田畑や村

落——みんなもの珍らしい。時間表をたどつて覗き出す驛々は、以前の名はあつても新らしく建ち變つたものばかりである。これから着く上野驛が、どんなに廣壯であるか、想像もつかない。田舎の老人にかう教へたものゝ、自分も實は、彼とちがはぬ初見参といつていゝ都會への旅なのである。電報は昨夜青森へ渡るなり打つて置いた。博巳が迎ひに出てゐるにはちがひない。もし博巳がゐないとしたら、自分もこの老人のやうにまごつくことであらう。

しかし、久しぶりで、なつかしい東京へ出て博巳に會ふのである。彼は汽車が走るにつれて微笑を禁ずることができなかつた。

しかも、彼には、この喜びのほかに、もう一つの喜びがあつた。——彼の經營する木材會社は、博巳の堅實に築きあげた業績にも助けられ、遂に取引先の主たる人々が熱心勸告するまゝに、一層手びろく事業を興すこととなり、年の改まつたこの一月末、株式組織といふ議が整つたのである。發起者に加へられるべき人々の名もやうやくまとまり定款もほゞ出来あがつた。加島を社長として一應會合する必要があるので、今度その上京をうながされることになつたのである。彼は、かうして山の「兄弟」の福利をいよ／＼増進させ、また、彼の事業の念願であ

る刑餘な性虐げられつゝある人間を、一人でも多くこの正しい兄弟仲間へ入れたいとの希望を實現しようとするのだつた。で、かうした旅は、故郷へ錦を飾るといふやうな簡単な満足ではなく、彼にとつて、美しく淨い世界を、あの山の森に建設するといふ深く大きな喜びの門出なのであつた。

いつもの質素な詰襟服に、ほんの手廻りのトランクが一つ——三等の客車の隅に、新聞をひろげて讀んでゐる彼には、どう見ても社長の妻はなかつた。いや、彼自身、社長といふ名は忘れてゐた。たゞ、これから會ふべき博巳、また自分の留守の間も、骨身を惜まず働き續けてゐる山の兄弟達の親父として、締つた唇に、嬉しい微笑を漏らしてゐるだけのことであつた。

——加島は立ちあがつた。

「さあ、着きましたぞ。」彼は、例の老人に注意した。

「有難うござえます。」

「忘れものゝないやうに。氣をつけておあげなさいよ。」彼は若者にも軽く會釋した。

「上野！ 上野！」高く驕夫は呼んだ。

轟！ と、長いブラットフォームを、列車は入つた。

「ちや、左様なら。」

「えゝ、有難うござえます。」

老人親子に氣輕な別れをつけてトランクを片手にさげた時、

「社長！ こゝです。お荷物を！」

いちはやく見つけて、窓から聲をかけた者——博巳だつた。

「おゝ、浦部さん！」

「荷物をお出しくださう。」

「荷物？ 荷物は小さなこれ一つだよ。」

「お出しく下さい。僕が持ちます。」

赤帽が近づかうとする前に、博巳は手を出した。

「なめに、軽いから。」

「お出ください。僕が持ちますから。」

「ぢや、お願ひするかな。」

笑ひながらトランクを窓から渡して、出口へ廻ると、そこに博巳は、耐へきれぬよるこびに手を出して加島を迎へた。

「大丈夫！」

元氣よく飛び下りる。——手と手は、そのまゝ堅く握りかはされた。

「お久し振りだつたな。」

「社長も御機嫌よく。」博巳の聲は喉につまつ。

「さあ、とにかく構外へ出よう。」

「えゝ、さうませう。」

混雑にまぎれて歩きながらも、兩人の話はやまなかつた。

「大分待つただらう。」

「えゝ、ちやうど一時間。」

「さうかね。なんでも白河の手前で線路に故障があつたといふのでな到着時間が狂つたのだ。」

「えゝ、その掲示が驛に出てゐました。早くお目にかゝりたいと思つてゐると、意地の悪いものです。焦こりました。」

「さうだつたか。それはお氣の毒だつたな。はゝゝゝ。」

兩人はやうやく改札口を出た。

「おう、なか／＼立派になつたな。えらい人出だ。」

「こゝは今、省線の電車に乗る人、それから地下鐵道も近くだし——ちやうど今頃が會社の退りけ時なので、なか／＼混みあひます。」

「さうかね。なるほど。」

構内を出た時、ホツとしたやうに加島はあたりを見廻した。

街にはもう、黄昏の灯がつきそめてゐた。連なる電車、右往左往する自動車、その間を駆けぬける人々——

「ふむ。」今さらのやうに加島は感心した。「いや、たいしたものだ。まったく變つた。わたし

ひとりだつたら迷ひ兒になる。」

「迷ひ兒？——はゝゝゝゝ。」

「いや、實際だ。汽車の中でも考へてゐた。なにしろ三十年ぢかくも御無沙汰してゐたのだからさぞ變つたことだらうと——三十年といへば、あんたがまだ生れなかつた昔なものな。はつはゝゝゝ。」

笑ひながらも、加島の顔には、感慨ぶかい色がみなぎつてゐた。

「さうですね。三十年——なるほど、僕が生れないさきです。」と、博巳はなにがなし微笑まれで、「僕がかうして三年目に樺太から歸つて來てからも、随分急激に變化してゐますからな。三十年といへば、その十倍ですからな。」

「だから迷ひ兒になるといつてもしかたがなからう。」

「はゝゝ。まつたくです。」

「あんな山の中から一足飛にこゝへ出たので、かうして眼の前にはげしい雜踏を見ると、なんだか危険で歩かれないやうな氣がするね。わたしの活躍した時代の東京とは、まるでちがつて

しまつた。……わたしの恐ろしい活躍をした時代……」

加島は、もう一度あたりを見廻して、苦笑をまぜた歎息を漏らした。——その「恐ろしい活躍」が、なにを意味するかを博巳は知つてゐた。

「社長、そろ／＼ゆきませう。」彼は、氣をかへるやうにいつた。

「あゝさうだね。」

「お宿をきめねばならないのですが、さしあたつて、居心地のいゝ、出入りに便利なところと存じまして、昌平橋のそばの旅館を考へてゐるのです。」

「そんなところよりも浦部さん、あんたの部屋へ泊めて貰ひたいな。お邪魔だらうが。」

「僕の下宿？ あそこは安つばい汚いところですよ。それに六疊の間ですから。」

「六疊なら二人は充分寝られる。是非そこへお邪魔したいな。」

「でも、あんまりひどいところですから。」

「ひどくつてもなんでも、支社長のゐる宿なら、わたしも満足しなければならん譯だ。あんたの下宿へゆかう。」

「しかし、社長。」

「いゝや、是非御厄介になりたい。わたしは、東京へ遊山に来たのではない。もつとも、暇を見て、一度東京見物位のはさせて貰ふつもりだが。はゝゝゝ。」

加島の心持はわかつてゐるので博巳はこれ以上には勧めなかつた。彼はむしろ率直によることで迎へるべきだと思つた。

「では、汚くて狭つくるしいですが、僕の下宿へ、おいで願ひませう。さうすれば、いろんな御相談をいたすのに都合がよろしうございますから。」

「御迷惑でも、なにぶん頼みます。かう變つた東京に、あんたと一緒にゐれば氣強い。」加島は愉快げに笑つた。

博巳は圓タクを呼んだ。

「自動車に乗るのをはじめだよ。嫌な馬車には度々乗つたがな。はゝゝゝ。」

——その「嫌な馬車」が、どんな暗いところへ彼を運ぶべきものだつたか、博巳にはわかつてゐた。

加島の、なに事にも、舊い痛ましい記憶を呼び起すのを、博巳は慰めなければならぬと考へた。——下宿について、夕飯の膳には疲勞を醫すると同時に、他の意味でも是非一本の徳利をつけねばならぬ——

「神田淡路町へ。」

——彼はトランクを抱へて、加島のあとから自動車に勢ひよく飛び乗るなり、かう運転手に命じた。

——下宿につくと、加島はトランクから質素な綿服を出して着かへた。

「用意して来たものは、この不漸着と、この新年につくつた洋服だけなのだよ。洋服といつても、やはりいつもの詰襟のもので、發起人の總會にこれを着て出るつもりだ。禮服といふやうな、特別の場合につかふものは、一生權太の山の中で働かうとするわしに必要はない。こんどはこれでゆるして貰ふつもりだ。だが、總會の開かれるといふ帝國ホテルは、随分服装のやかましいとこだといふが、どうかな。」

「僕もいつもの背廣服で出るつもりです。——それでいけないといつても、ないからしかたがありません。」博巳は笑つた。

加島も笑つた。そして、はじめてあたりを見まはした。——壁の縁もそよげ、梁もゆがんで三十燭の電燈をつけたこの見すばらしい六疊に、小さなニス塗りの机が一脚と、懸物や花瓶一つない床の間に、うづだかい帳簿と、讀みさしに、しるしの紙箋をはさんだ書物が二三冊、それでもキッチンと置いてある。——歸らうと思ふならば高壯な邸があるのだ。立派に飾られた部屋があるのだ。さうして、彼の父は、今はよろこんで彼を迎へようとしてゐるのだ。それに彼はこの不自由な、みぢめな生活を、苦にもしないやうに、否、むしろ満足しきつてゐるやうに飽くまで快活に笑つてゐる——

切り貼りをした障子、煤けた壁——から、ジツと博巳に移した加島の眼は、熱くうるんで來た。

「社長、久しぶりの東京は、どんなお心持がいたしますか。」

それに氣もつかないで、博巳は行儀よく坐つた膝に、膝を張るやうに両手をつきながら微笑

した。

「いや、自動車の窓からのぞいただけだが、なんだかゴタクサと混雜してゐるばかりで、煩さいやうに家が建てこんでゐるのを見ると、窮屈でいけない。檻すに入れられたやうな感じがするよ。はゝゝゝ。」

「檻——さうですな。檻です。たしかに檻です。あのどこもかもあけつびろげた、山の森と空を思ふと、たしかにこゝは檻ですね。あゝ、僕も早くあの山の森へ歸りたいな。」

「いや、山も雪で、みんな雪籠りをしてゐるから、あそこも檻といへば檻かも知れん。」
「そんなことはありませんよ。僕も二度、あそこの雪や氷を見たわけなんです。が、籠つてゐるといつても、あそこは實に行きづまりのない、ひろい、大きな世界です。そとは寒い暗い天地で、みんな宿舎に、あんなに膝を押しつけあつて、黙つて夜業仕事をしてゐる時でも、なんだかあかるい、せいせいしたところに置かれてゐるやうです。兄弟の心がみんな一つに暖かく溶けあつてゐるから、すこしの煩ひも屈托もない自由な世界を感じます。心がどこへでも、なんの掣肘もうけないで飛んでゆきます。あの森の生活は檻ではありません。僕も早くあそこへ歸

りたい。「博巳は考へるのも羨ましげであつた。

女中が、特別に注文された二つの膳に、かたばかりの銚子を添へて運んで来た。

「どうぞ。」博巳は徳利をもつた。

「こりや御馳走だな。頂かう。」加島は嬉しげに盃をとりあげた。

博巳の盃にも加島は注いだ。兩人は、健康と会社の將來を祝しあふやうに、互に目禮しながら一つ乾した。

「山の兄弟は、相變らず元気でせうね。」

「うむ、みんな丈夫で、よく働いてゐる。誰も彼も、君に會つたらくれぐれもよろしくいつてくれと傳言だつた。」

「さうですか。あゝ、歸つて見たいな。」

「はゝゝ。君には、まだ／＼こゝにゐて貰はねば困るよ。かうして事業が發展してゆくにつれて君にはいよ／＼東京に踏みとどまつて貰はねばならないのだ。」

「しかし、これから年に一度は一ヶ月でもいゝから山へ歸らせて頂けるやうに願ひします。」

株式組織となれば、こちらにも誰か、僕以上に重要な地位に就かねばならぬ人がある筈です。勿論僕も一層働きますが、これからの大きな責任は、僕のやうな経験の浅い者には背負ひきれません。さうなれば、是非、山と東京との聯絡をとるやうな仕事を僕にさせて頂きたいのです。「いや、それはいけない。わしはどこまでもあんたを信頼してゐるのだ。あんたに東京の事務を一任することに異存のあるやうな話が出れば、わしは株式組織にすることをやめる。わしは山の兄弟が安穩にやつてゆければいゝので、事業を擴張することは、あゝした兄弟を一人でもよけいに殖すことのためなのだ。わしは金儲けしようと思ふのではない。たゞ、山のあの兄弟の國を大きくひろげてゆくといふのが根本義なのだ。無論、株主になる人々の目的は金儲けだらう。それはそれでいゝ。儲かればどんなにでも儲けさす。だが、こつちの考へは別問題なのだ。この點の諒解がつかないやうなら、わしは一切をお断りして歸つてしまふ。そしてあなたの努力を頼み、山ではみんな一生懸命に働いて、すこしづゝ仕事を展つばしてゆけばいゝ。たゞわしは、なんとかしてあゝした兄弟を早く殖したいために、かうした組織にするといふまでなのだ。」

——深い感動をもつて、博巳は思はず頭をさげた。

「わしは焦つてゐるかも知れない。が、あゝした人達が、社会のどこにも容れられないで、なほ自暴自棄になつて、恐ろしい審判の淵に落ちてゆくのを考へるとどうも焦らずにはゐられない。あの森へ引取れば、どんな人間でも、すぐ兄弟の仲間によるこんでなつてくれる。わしはなんの力ももつてゐない男だが、この仕事だけに自信がある。」

「さうです。たしかに。僕もその一人でした……」

「はゝゝゝ。いや、今夜はこんな話はよさう。」

「山の兄弟達のために、一つ。」博巳は、また徳利をもつた。

「あんたも一つ。」加島も、また、博巳に注いだ。

二つの盃が、祈るやうな眼であげられた。

「久しぶりに酒を飲むことだな。二三杯で、大變酔ふたやうな気がする。」

「社長、以前はかなり召しあがつたでせうね。」

「あゝ、飲んだ。だが、あの頃のは自暴酒といふやつで、いくら飲んでも酔ひもせず、うまく

もなかつたよ。さういへば、あんたも以前は飲んだものだらう。」

「え。」博巳は苦笑して、「しかし、僕のも、苦い冷い酔へない酒に過ぎませんでした。今夜のやうにうまい酒は、飲んだことがありません。」

「さうかね。では、うまいところで、もう一つ。」加島は注いだ。

「僕もなんだか酔つたやうです。」

「まあ、いゝ。徳利が二本來てゐる。残すのはもつたいない。お互に久しぶりだ。これだけは飲もう。」

「社長、長い旅でお疲れでせう。」

「はゝゝ。山で鍛へた身體だ。これ位に疲れるものか。」

「總會は四日の後になりますが、その間に、支社の事務も一應見て頂きたいと思ひますし、事務員達とも一晩ゆつくり懇談会のやうなものを開きたいと存じます。」

「さうかね。それはよからう。それから、明日は日曜だが、それを幸ひ、ひとつ、あんたの案内で東京見物をさせて貰はうと思ふ。田舎者だ。淺草も見せて貰ひたいよ。」

「浅草……よろしくございます。實は、僕もこの三年來、あのほうへは参りません。御一緒に見物いたしませう。」

「わしはまだ映畫といふものを見たことがない、ひとつ代表的なのを見せて貰はねばならん。新知識を得るためにな。」

「承知いたしました。」

「會社ですこし金の餘裕ができたなら、あの機械と畫を買つて、宿舎で映して、みんなに慰安を興へたいと考へてゐる。この頃は、北海道の炭鑛あたりでは、しきりに映畫を用ひて、坑夫達の慰安會を開いてゐるやうだ。ひとつその参考にも見物して置きたい。」

「それはいゝお考へです。」

「さしあたり、今度は蓄音機を買つて歸るつもりだ。それもあんと一緒に行つて、盤を選んで貰ふつもりだよ。もつともあんたは音楽に耳が肥えてゐるから、西洋のむつかしいものを買つてくれちや困るよ。山ではやつぱり浪花節か淨瑠璃か流行唄か——そんなものがいゝのだ。」

「山の兄弟の好みは僕にはよくわかつてゐます。大丈夫です。」博巳は微笑した。

献酬が続いた。

兩人に、いゝ心持の酔が廻つて來た。

「うむ……」加島は、赤くなつた顔をツルリと撫でたが、「浦部さん。ひとつ、東京の面白い話も聞かさんかな？」

「面白い話？ べつに、面白い話つていふものはございませんが……」

「あんたは、あれに會つたかな？」

「あれ……？」

「うむ、あれだよ。」

「あれと申しますと？」

「あれだよ。あの女だよ。よく山へ手紙をよこしたあの……麻知子とかいふ女だよ。」

「麻知子……」

博巳は困つた。が、會はないとはいへなかつた。

「どうだね？ あれ程あんたを思つてゐた女だから、あんたが東京へ出た位、すぐどうにか嗅

ぎつけて會ひに来たと思ふがな。」

加島は笑つた。

「……」

「どうだな？」

「會ひました。」

博巳は疾しいところなくうなづいた。はからず彼女とT劇場の歸途に會つたことを話した。

「ふむ、さうかな。やつぱり先方はあんたが思ひきれんと見えるな。そいつは面白いな。はゝゝ。」

「ちつとも面白くはございません。不愉快な奴です。」

「まあそんな苦い顔をせんでもいゝ。實はな……」と、加島は軽く笑ひくだけ、「その女がわしに手紙をくれたよ。」

「え？」

「はゝゝゝ。」

「どんなことを書いて出したのです？ 怪しからん。」博巳は憤慨した。

「あんたが立派な人間になつたことを感謝してあつたよ。」

「いらぬ世話だ。失敬な。」

「まあ、さういふと、わしが叱られてゐるやうぢやないか。はゝゝ。」

「で、それからなんと書いてございました？」

「自分も、今までの生活の不眞面目であつたことを充分悔い、できるかぎり立派な正道を踏む女となる決心をした。それで、どうぞ、博巳さんが心から尊敬してゐるあなたの力にすがつて、お願いの上のお願いをする。あなたのお力で、わたしが眞實に博巳さんを愛してゐるといふことを、お諭しくださいだつたかいひ知らせてくださいだつたか、そんな意味の文句だつた。」

「僕を諭してくれ？ 失敬な奴だ。」

「はゝゝ。いゝぢやないか。わしは一向に取りあはんのだから。」

「いくら社長がお取りあひなさらないでも失敬、失敬です。そんな、そんなことまでしやがつたのか。」

「まだ、ひとつ書いてあつたよ。」

「え、それはどんなこと？」

「はゝゝゝゝ。」

「どんなことです。社長。」

「いろんな自分の苦衷をならべたてたあとでな——」加島は博巳を見て、「つまり、これほどの自分の苦しい眞實が博巳さんに通じないといふには、一つの原因がある。それは、博巳さんに今、他の一人の愛する女が現はれたことだ——とな。」

「僕に愛する女が現はれた？」

「さう書いてあつたよ。」

「馬鹿げたことをいふ奴です。そんなものは断じてありません。」

「さうか。しかし今のあなたなら、そんなものがあつたつていゝよ。」

「いや、断じてありません。僕はそんなものを考へる暇をもちません。」博巳はいよゝ憤慨した。「ありもしないことを捏造して、失敬な奴だ。」

「また怒つたかね。いゝではないか。わしは読んで笑ひ棄てたのだから。」

「しかし社長は、そんなものがあつてもいゝなどと仰有いました。社長の口からさうしたお言葉を聞くのは残念です。」

「それは、今のあなたなら決して相手の選擇を誤らないことを、わしはよく知つてゐるからいつたのだよ。」

「僕は、僕の一身上に關する限り、どんなことでも社長にお話して、社長の御意見によつて行動する覺悟です。勝手な眞實は絶対にいたしません。」

「まあ、そんなにむきにならないでいゝ。笑ひ話だ。さあ、あとわしの一杯とあなたの一杯でおつちりだ。一つ行かう。」

加島は上機嫌の眼を細めて、博巳に盃をさした。

——翌日、それでも博巳は、快く午前七時に床を出た。

加島は、さすがに疲れたのか、まだ眠つてゐた。彼はなるべく加島の眼を覺さないやうにし

て、洗面にゆくと部屋へも入らず、廊下で新聞を読んだ。晴れやかな日光がいつばいにあたつて、二月はじめにしてはめづらしい暖かさであつた。

裾を端折つて、縁を拭いてゐた女中は、博巳にちよつと挨拶したが、

「今朝は、お客様に、なにか別に御馳走でもこしらへませうか。」

「あゝ、さうだね。」品ばかりつけてください。」

「承知いたしました。」

「わしにはなんにもいらんよ。味噌汁と香の物で結構だよ。」

その時、うしろで加島の聲がした。

「や、もうお眼さめですか。」

「はゝゝゝ。今朝はすつかり寢坊をした。」

「でも、お疲れでせう。もつとおやすみなさればいゝに。」

「今日はあるに、はらばう見物に連れて行つて貰ふのだ。今日一日はさうして遊べる日なので、寢坊してゐては時間をもつたいないよ。はゝゝゝ。」

加島は、遠足にでも出かける小學校の生徒のやうに嬉しげであつた。

——彼の洗面する間に、部屋は手早く、博巳に手傳はれて、女中が掃除をすました。すぐ主人は朝の膳に向つた。それから洋服と着かへた。

「あの、お客様でございますが。」

女中が、障子を開けた。

「お客様？」博巳は上着の釦をはめながら、怪訝な顔をした。

「えゝ、女のお方でございます。」女中はニヤ／＼笑つた。

博巳は、姉の奈津子だらうと思つた。

「なんといふ人だね？」

「室谷様と仰有いました。」

「え、室谷？」

博巳はなぜとなく困つた顔をした。今まで一度も訪ねて来たことのない愛子が、時も時、わるい時にやつて来たのである。

「いや……今日はこれから兩人で、一日外出しなければならぬのだが……さうだ。さういつて、今日は失禮だがお歸りくださるやうにとお断りしておくれ。」

「浦部さん。いゝではないか。折角訪ねて來られたのだ。誰方か知らないが、こゝへお通しするがいゝ。」加島は坐らうとした。

「いや、かうして、出かけようとしてゐるんですから。なに断つてもいゝのです。」

「よくはない。折角來られたのだ。ちよつとでも會ふがいゝよ。」

「でも、社長、折角、あなたを久しぶりの東京見物に御案内する大切な日ですから。あなたもお疲れのところを、時間が惜しいとまで仰有つてゐらつしやる時に……」

「それはいつたが、時間が惜しいといつても、こつちは遊びなのだ。なほに、いゝよ。わしは待つてゐてあげる。」

「なに、~~いゝ~~方も、用事があつて來たのではないのですから。」

「會ひもしないで、用事があるかないか、それはわからんぢやないかね。また、たとひ用事がなくとも、折角來られたのだ。會ふがいゝ。なんならわしは中坐しようかな。」

「いえ、そんな必要はないのです。」

「なければ、とにかくちよつとでもお通しするがいゝ。」と、加島はうなづいて、女中に、「どうかそのお客様を通してください。それから、ついでにこの膳を片づけてな。」

「どうぞ。」女中は障子をあげた。

美しい愛子の眼が、軽く笑はうとした——が、博巳のほかに、未知の人の、ギチンと詰襟服を着たまゝ坐つて、膝に手を置いてゐるのを見ると、

「あ。お客様で……？」彼女は部屋へ入りかねた。

「いや、いゝのです。お入りください。御挨拶はあとでします。わたしはお會話の邪魔になるやうなものぢやない。」温情にみちた、加島の聲であつた。

「さあ、どうぞ。」女中もいつた。

が、愛子は、やつぱり逡巡つた。

「浦部さん。あんたがお入りといはんからいけない。」

「どうぞ。」と、博巳はのぞき出した。

「では、失禮させて頂きます。」

静かに頭をさげて、愛子は入った。女中は障子をしめて行つた。

「さあ、どうぞ。」と、加島はみづから座蒲團を勧めながら、「浦部さん、紹介してくれ給へ。」

「え、あの、室谷さん。このお方はわたしの社の加島社長です。」博巳は言つた。

「あ、左様でゐらつしやいましたか。わたくし、室谷愛子と申します者で……」

「わたしは、加島慶太郎です。よろしく。」

飽くまで碎けて加島は、微笑の挨拶をした。

——愛子もまた叮嚀に疊に手をついたが、

「お出かけのやうでございませうけれど、わたくしお邪魔になりましたは……」

「いゝや、なあと今日はこれから浦部君に東京見物をさせて貰ふつもりなんで、べつに用事があるわけではありません。どうか、ごゆつくり。」

「おや、それは……わたくしも、用事で参つたのではありませんから……お構ひなくお出か

け遊ばして……」

愛子が、もう歸らうと座蒲團に手をかけるのを、

「なあと、決して御心配なく。さあ、浦部さん、あんたも話すがいゝ。」

「えゝ。」

——さういつても、博巳に會話の穂があるわけはなかつた。

「わたくし、ほんたうにお邪魔になりますから……」

「まあ、いゝです。どうか。さあ、浦部さん、あんたがなんにもいはんから、室谷さんがあゝ困つてゐられる。」

加島は促した。

「え……」

——さういはれるほど、會話の緒口は見つからなかつた。愛子も膝の上ばかり眼を落してゐた。

加島は愛子の、しほらしい美しさを、またそれとなく見やつたが、一瞬、なぜか、彼の瞳に

強い光が閃めいた。

「……似てゐる！」妙に低く謎のやうな一語を呟いた。

聞きとがめるやうに、博巳は加島に顔を向けた。

「いや、なに：：はムムム。」加島はさりげなく軽く笑つたが、「浦部さん。このお方は、どうしたお方なんだな？」

「え。不思議なことで、お知りあひになつたので。」

博巳は、愛子を助けて以來のことを話した。

「さうか。ふむ。いや、それは面白い話だ。愛子さんと仰有る——愛子さん——」加島は親しげに彼女の名を繰り返しかへした。が、ふと思ひついたやうに、「お、さうだつた。あの手紙にあつたのも愛子さんといふ名前だつた。」

「え？」こんどは愛子が聞き咎めた。

「いや、さうだつたか。はムム、いや、あなたがその愛子さんだつたのか。」

「は……？」

愛子には、どうやら自分を、知つてゐるらしく見える加島の言葉が、さつぱりわからなかつた。——あの手紙とはなんだらう？

博巳は、社長が言はないでもないことを言ひ出したと困つた。いたづらに苦笑した。

「いや、室谷さん。わたしはあなたの名を樺太にゐて、ちやんと知つてゐるのですよ。うつかりして、今やつと気がついたのです。はムム。これは迂遠だつた。」

愛子には、なほわかりやうはなかつた。——或は、博巳さんが手紙のなかに、自分のことも書いたのではないか？ さうだとすると？ ——いや、いやあの方が、そんな手紙を書かれる筈はない——

彼女は不審のうちに、自分にも意味のわからない恥かしさを感じた。妙に顔があげられなくなつた。

「室谷さん。あなたには、かうしてはじめてお眼にかゝるのだが、わたしはあなたの名だけはどうに知つてゐたのですよ。はムムム。」

「どうして？ ——で、ごさいませう？」

「いや、それは、まあ、今はいふ必要はない。はゝゝゝ。」

麻知子からの手紙に、彼女のことを書いてあつたので、實は、加島は、東京へ出たら、麻知子なんぞには會はうとは思はないが、愛子といふ女性には會つて見たいと考へてゐたのであつた。それが、かうしてすぐ注文通りの機會で會へたのは満足である。しかも様子から見れば、彼女が博巳を訪問したのも、これがはじめてのやうである。そのはじめての機會に、自分とともに加はつてゐるとは妙に縁の深いやうな氣がする。そして――

そして――縁が深いといへば、そのうへにも不思議なことは――

「似てゐる！ まつた、似てゐる！」――彼は心のなかで、まさしく、かう叫んだのであつた。「あの長い眉！ あの眼！ あの口！」

愛子は、ちよつともたげた顔にジツと加島の光る瞳が注がれてゐたので、譯知らずたゞ恥しさに、あわてゝうなだれた。

彼女は、なんだか、加島にもつと訊きたかつた。が、それ以上、もう一度訊きなほすことはしたくないやうに思はれて、氣がかりながらも口を噤んだ。博巳も、それ以上に加島がいつて

くれぬことを願つた。――が、もう一つ、加島が思はず口に吹き、今また心に叫んだものを、兩人とも知る筈はなかつた。

「……いや、室谷さん。」と、加島はなに氣ない温顔で、「どうです。今日は浦部君に丸の内と銀座と淺草へ引つ張り廻されるのだが、御迷惑でなくば、あなたも一緒にお出でなさんか。今日はかうして御訪問なすつたほどだから、お暇はありませう、え、どうですか？」

「はあ。」愛子は、躊躇した。

「どうですか。わたしの東京見物を、めづらしくもないあなたに強ひるのは御迷惑でせうが、まあ、三人で、散歩する位のつもりでな。夕方にはお歸ししますよ。それとも、まだ、どこかお友達でも御訪問なさる豫定がおりなのですか。」

「いゝえ、そんなことはございませぬけれど……わたくしが参りましたは、却つて、あなた方が御迷惑と存じます。」彼女は、チラと博巳を見て、美しく微笑した。

「わたしのはうではあなたの参加を歓迎するのですよ。なあ、浦部さん。」

「……え。」

加島の心置きのない笑ひに、博巳は、いゝとも悪いともつかぬ返事をした。
「でも……折角のお遊びに、はじめてあがりましたわたくしが、厚顔あつちましくお伴いたしましたしては……」

「お羞し支へはないのでせう？」

「はあ……それはございませんけれど……」

「そんならあなたのお嫌になるところまで御一緒に、いかゞです。どこからでもお歸ししますよ。なあ、浦部さん。あなたも無論賛成だらう？」

無論といふ言葉が、博巳の耳に殊更らしく響いた。しかしこゝで、愛子の前で、辯解がましかつことをいふのも變である。彼はちよつと黙つた。

「無論賛成だらう？」

「……ええ。」

「さうか。では、望谷さん……？」

「お伴させて頂きます。」恥らひながら、愛子は頭をさげた。

「や、衆議一決だ。早速出かけることにしよう。」

——三人は下宿を出た。

——道順といふので、まづ九段の靖國神社へ参拜し、ついで宮城前でならんで敬虔に頭をさげた。丸の内の壯觀と、銀座の繁榮とは、加島を感服させた。彼は見るものくゞめづらしく博巳に質問した。

博巳は一々仔細に説明してやつた。愛子も、その傍から、時々はつゝまじやかに言葉を加へて、加島を満足させた。

——淺草の映畫見物が、どんなに加島をよろこばせ珍らしがらせたか。場面の最高調になつた時、彼は全く子供のやうに、手を拍ち足を鳴らした。それを博巳はまたどんなにか嬉しく思つた。

愛子は、博巳が心から推服してゐる加島の人格に、強く撃たれた。質實で溫情にみち、まづたく自然から切り取つたやうな淨く大きな無我無慾の人間に接し得て、べつに多くの言葉をかはしたのではないが、たゞその姿を見てゐるだけで、なにか深い教へと戒めを與へられたやう

な気がした。

彼女もやつぱり、加島がよろこば嬉しかった。さうして日暮れちか頃三人は館を出た。「夕食をしたいが、あなたはまだ御迷惑でありますまいな。」加島が勧めるその言葉を、彼女はなんの辭退もなしに、「有難うございます。」と受けるほど、心からこの人に親しみを感じてゐた。でも、念のため、家へ心配せぬやうに自動電話をかけた。母の里子が出て、それはいゝことだから、お伴して九時頃までに歸つておいでといはれた時には、彼女は嬉しい上にも嬉しく晴やかな氣持になつた。

三人は連れ立つて、仲店の裏の小さな料亭へ入つた。

「や、今日はお蔭で、大いに眼の保養をした。まづこれで東京見物を終つたわけだ。あなたもお疲れでせう。」

「いゝえ、わたくしも、淺草は、ほんたうに幾年ぶりかでございます。いゝ日に、浦部様をお訪ねしたと存じます。」

加島に應へながら、愛子は博巳へ微笑した。

寄せ鍋が運ばれた。

愛子は調味をひきうけた。

「あの主人公をひきうけた役者——あの學生の両親と戀人とに分ける氣持はうまかつた。」と、加島は博巳から愛子へ眼をうつしたが、「あの、學生の戀人になつた女優——しとやかで可憐で美しい。ちやうどこの愛子さんに似てゐたな。」

「あら、あんなこと仰有つて……」

箸で鶏肉を鍋に入れてゐた愛子は、あわてゝ顔をそむけた。

「いや、女優に比較しては相濟まんが、あんなの眼、その口もと、ほんたうにあの戀人にそっくりだつた。」

加島はジツと、恥しげに箸をうごかしてゐる愛子を見た。そして——彼はひとり微笑した。

「……いや、似てゐるといへば、わたしは今朝はじめてこの方にお會ひしてゐる時からさう思つたのだが、この方にこく似てゐる人をわたしは知つてゐるのだよ。」

「え？ それはどなたです？」博巳はめづらしいことを聞くといふ風ふうに加島を見た。

「さや、それはいいはれないがね。」

加島は高く笑つた。が、その笑ひの底に、妙に苦しい響のあることを博巳は不審に思つた。

——酒のない。静かな、しかし楽しい夕食が済んだ。

九時までは母のゆるしを得たといふので、愛子はこれから宿へ歸る加島と博巳についてゆくことになつた。彼女はすこしでも長く兩人の話を聞きたいと思つた。愉快な談笑のうちに、彼等は電車で下宿へ着いた。

「あの、お客様が、さつきからお待ちになつてゐますが。」と、女中が博巳を見るなりいつた。

「お客？」

博巳が女中を振り返つた時、

「わたしですよ。」

——つい玄關のそばの、簡単な應接間にあてられた部屋から、スリッパをはいたまゝ現れたのは、今日ことに念入りな化粧をした和服姿の麻知子だつた。

博巳は石のやうに立つた。

「お歸りなさいまし。」

すぐ、チロリと、博巳のうしろにゐる愛子の姿を見た彼女は、皮肉らしく殊更町噺に頭をさげた。

「……………」

「今日は御散歩に、はうばうお楽しみださうでしたね。わたしこゝで三時間の餘もお待ちしましたのよ。」

「……………」

「ほんたうにわたし、もすこし早くこゝへあがればよかつた。さうすればお伴ができましたのにね。ほゝゝ。」

相手が黙つてゐるのを、かまはず彼女は笑ひかけた。

「浦部君、この方は？」

加島が前に出た。

「……………」

「あの、わたくし、かやうなものでございます。」

麻知子はロシア革のハンド・バックから小型の名刺をつまんで、加島にさし出した。

「お、あなたが瀬戸麻知子さん。」加島は、彼女を見なほした。

「失禮でございますが……？」

「あ、わたし、加島慶太郎です。」

「おや、あなたが加島様で……」彼女も、意外なやうに、その質素な詰襟服に眼をやつたが、更に仰々しく頭をさげて、「これはお見それいたしました。」

「いや、わたしこそ。」

「あ、あなた様の御上京で、それで今日は……」

「久しぶりで東京見物させて貰つた譯です。は、は、は。いや浦部君、こんなところで話もできない。部屋へゆかう。」

「しかし……」

博巳は躊躇した。——それに、なにか眼くばせするやうに加島は靴をぬぎかけて、

「瀬戸さんなら、お手紙は貰つてゐながらお目にかゝらんだ。ちやうどい。お話もしたい。」

「さあ、愛子さん、あんたもどうぞ。」

「わたくし……」

失禮させて頂きませうかといひたさうに、彼女は逡巡した。

「まあい。あんたも九時まではお許しが出てゐるのぢやありませんか。折角この宿までおつきあひくださつたのだ。まあ、おあがりなさい。浦部君、なにをしてゐるのだ。さあ、みんな一緒に部屋へゆかう。」

博巳もしかたなく靴をぬいだ。

「さあ、どうぞ。」玄關にあがつて、加島は振りかへつた。

「お邪魔させて頂きます。」麻知子は愛子に険しい視線を注ぎながら、加島へ挨拶した。

「どうぞ。」

「どうぞお先へ。」

「ちや、失禮します。」

加島はその梯子段を昇つた。麻知子もあとについた。そして、二三歩隔て、續く博巳と、そのうしろにかくれるやうに従つた愛子にもう一度、険しい視線を投げた。

部屋に入つて座についた時、麻知子はまた改めて、加島に一禮しながら、

「お留守の間にあがりました。……あなたが加島様とは存じませんで、失禮いたしました。偶然お伺ひいたしましたお目にかゝることができましたのは、まつたく思ひがけない儲けものでございました。ほゝゝゝ。」

さうひとり嬌笑するのを、加島は機嫌よげに、

「いや、あなたにはわたしも一度是非お目にかゝりたかつたのです。あなたから貰つた手紙に返事ひとつ差しあげなかつたが、上京する機会が近づいてゐたので、いづれ東京でお目にかゝれるだらうと思ひましてな。」

「あの手紙……」麻知子は、愛子をやゝうしろに、かばふやうに坐つてゐる博巳に眼を走らせたが、「大變ぶしつけない、露骨なことまで書きまして、さう仰有られます。……なんだか今さらきまり悪うございます。しかし、なんと申しまして、一應お話申しあげねばならないことで

ございますし、わたくしといたしましても、よく自分を諒解して頂きたく存じまして……」

「さうですか、いや、あなたのお心持はよくわかつてゐるのです。浦部君もかうして、これから人間としてのほんたうの仕事をしなけりやならん男で、今が最も大切な時期ぢやから、わたしもあゝした御忠告や御心配は、有難く思つてゐるのです。」

加島は、博巳へ微笑した。——知らぬ顔でゐよといふ心持がその微笑のなかに籠つてゐた。

「えゝ、ほんたうに……仰有います通り、浦部様は今が大切な時期でございます。立派にお仕事をなさいます上からも、めつたな迷ひや誘惑があつてはなりませんし、また、お仕事をなさる程の方なら、責任といふもの信用といふものが大事でございます……」

どこを押せばそんな音が出るかといふやうな言葉を、平氣で彼女はいつた。

「さうです。たしかにその通り——仕事を立派にやつてのける人間には、責任と信用がなによりです。責任を重んじてこそ人間に信用といふ箔がつく。浦部君も、この點ではよく考慮もしました着々實行にそれを示してゐるから、わたしはよろこんでゐるのです。」

「浦部さんが、かうして御立派なお心持になられましたことは、まつたく加島様のお力だと存

じます。わたくしも、これからはあなた様になにかと御指導を願ひまして、自分の進むべき道を正しく切り拓いて参りたいと存じます。ほんたうに、わたくしのやうな、女の腕ひとつで世を渡つてゆかなければならない者は、なんと申しましても、深窓に育つて、浮世のあらい風にあたらないお方とはちがつて、心持にも身體にも、暗い影や哀しい傷をもつてゐるのでございます。運命と申すものでございませうが、自分ながら、つくづくなさけないと、時には神さへ呪ひたいほどの、恐ろしい氣になるのでございます。」

わざとらしくうち萎れる麻知子を加島は靜かに笑つて、

「神を呪ふ？——それはいけない。どんな時にも、そんな考へを起してはならぬ。神は苦惱といふものを人間に與へてそしてお試しをなさるのです。運命といふものは、それは決定的だが、神の試練といふものにはわれ／＼はその大きな意志のあるところをよく理解して、なぜにわれ／＼はかく苦しまねばならんかを心の底に味はねばならないと思ふ。」

「さうでせうか。」

「さうです。神の試練——それは人間に力を與へます。眞實を教へます。それは神の用意であ

り計畫であるのです。神を恨み神を呪ふことは、かりそめにも考へてはならない。神の大きな意志通りのもの——運命を正しく享けるのです。」

「よく、わかりました。」と、麻知子はいかにも感じ入つた體でうなづいたが、「ですけれど、わたくしのやうに境遇に虐げられてゐます者は、世の中に神もなにもないやうな氣がいたします。いゝえ、神があつても自分だけがお眼こぼしになつてゐるやうな氣がして、いけない事とは知りながらも、神は不公平であるとお恨みしたくもなることがございます。でも、唯今のお話でよくわかりました。わたくし、きつとこんな考へはもちません。神のお試練といふことをいつも心に浮べて、自分を戒めることにいたします。」

「それはなりよりだ。わたしもな、以前若い時分に、そんな誤つた心に陥つてゐることがあつたのです。若い時はとかく自省といふものを缺くのでな。」加島は笑つた。

茶が運ばれた。

麻知子は押れ／＼しく、すゝんでみんなにそれを分けやうとしたが、加島の前へ置く茶碗を故意か偶然かパタリと取り落した。

「あ。失禮を。」と、ハンカチを出して鼻を拭きながら、「手を痛めてゐるものでございますから……」

「怪我をされたのかた。」加島はのぞくやうに言つた。

「え。往來で轉んだものですから……それからかなり日が経つてゐるのですけれど、どうかするとズキンと痛みを感じる場合がございますので。」彼女はチロリと博巳を見やつた。

「ほう。それは危なかつたな。若い時は足もとを考へずに元氣にまかせて歩くのでな。」

「いゝえ、亂暴に、突き倒されたのでございますの。」

「どうして？」

「どうしてでしたか……ほゝゝゝ。」彼女はまた博巳を見やつたが、「浦部さん。ちつともお話をさらないのねえ。」

「……」博巳は堅く唇を締めた。

麻知子は、博巳のうしろに、隠れるやうに坐つてゐる愛子に眼を走らせた。

「あなた、どうぞもつと前へお出まし遊ばせな。ほゝゝゝ……浦部さん、御紹介くださいな。」

しかし、博巳は應えやうとしなかつた。

「わたくし、室谷愛子と申します。どうぞよろしく。」愛子は頭をさげた。

「おや、失禮いたしました。わたくしの名を先に申しあげませんで。」と麻知子は嫌味に居づくるひを改めて、「わたくし瀬戸麻知子と申します。浦部さんとは古い〜お馴染みの者で。どうぞよろしく。」

「そんなことを言つて貰ふ必要はない。」と、博巳は吐き出すやうに言つた。

「おや、なぜ？ なぜですの？ わたしとあなたの間にお馴染みつて言葉をつかつてはならないのでせうか。わたしはもつと、これ以上の言葉をつかひたいのよ。」

「それは過ぎ去つたことだ。」

「だから、わたし、古い〜お馴染みつて申してゐます。」

博巳がやゝ怒つてなにか言はふとした時、

「まあ、いゝではないか浦部君。」と、加島は脇から制して、「さうだ。お馴染みだ。お馴染みでなければ、わしにあゝした手紙をくださる譯がない。——いや、瀬戸さん。あなたがわたしに